

---

# 総理を殴りに行こう

古谷円

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

総理を殴りに行こう

### 【Nコード】

N6159U

### 【作者名】

古谷円

### 【あらすじ】

純朴な青年、利宗に課せられた命題。

それは「総理大臣を殴り飛ばす」こと。

彼は無政府主義者でもなければ、あぶない活動家でもない。

しかし若者は、全身全霊をもって、総理との死闘に臨むだろう。

なぜなら、挑戦から逃れようとすれば、親愛なる姉が間違いなく彼に宣告するはずだから。

「切腹である。」と

## 第一章 僕は宣戦布告をした（前書き）

この小説は、何らかの政治的メッセージを伝えたいとか、そんな高尚なモノではありません。

ていうか、そんな大層なことは書きたくても、無理です。

ムズカシイですから。

あと、この物語はもちろんフィクションです。

ちよつと変な総理大臣や政治家が出てきますが、政治に無学な私が妄想したキャラクター達です。

当たり前のことですが、実際の政治家さん達は、ちゃんと常識のある人たち・・・なのでしょう。

で、ですよね？

拙い文章力で申し訳ないのですが、ご一読していただいたら、とても嬉しいです。

## 第一章 僕は宣戦布告をした

焦げる・・・

体毛という体毛が焦げる・・・

窓からは思いやりゼロで人命無視な陽光が、僕をこんがり照らしてくれている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あぢい。」

時計の針は七時を指そうかとしていた。

蝉の鳴き声に交じって、どこからともなくラジオ体操のメロデ

イーが流れてくる。

わかったよ。

起きようじゃないか。

こういう時は思い切りが肝心だ。

せええの！！

「・・・・・・・・・・・・・・・・うええええ。」

どうやら僕は、人生初の二日酔いを体験中のようだ。

昨夜、あやね姉さんの晩酌に無理やり付き合わされたのだった。

こういうのって、もっとソフトに苦しいものだと思っていたよ。

ハードパンチャーのボディブローだって、これよりいくらかは

慈悲深い。

なんでこんなに飲んだのだろうか？

普段は一滴だって飲まない僕が。

昨日の記憶をさかのぼってみる。

うん？

何も覚えとらんぞ。

「目が覚めたようだな、利宗。」  
「はい？」

どうやら僕は、リビングでそのまま眠ってしまったようだ。

ゆっくりと辺りを見回すと、上等なスーツを着こなした、いかにもキャリアウーマン風の若い女が、朝食の鮭を優雅に口に運んでいる光景が目飛び込んできた。

その動作には、全く無駄がなく、まるで伝統芸能か武道の型のように食事をしている。

この一切隙のない雰囲気醸し出す女性こそが、僕の姉の土筆<sup>つぐし</sup>あやねである。

多くの人が、僕の姉に抱く第一印象は「美人」だそうだが、すぐに次の感情が湧く。

「怖い」

その肩まで伸びる美しい黒髪は、芸術品のようだし、潤んだ瞳は吸い込まれそう。

まるで彫刻のような顔立ちに惹き付けられない男性はいないはずだ。

しかし、顔のどこかのパーツだけバランスが悪いのか、それとも完成されすぎて神々しいのか、不思議と姉を前にすると、大抵の男が不安感や恐怖心に苛まれるのだそう。

他人は不思議がるが、僕にはその理由がわかる。

姉の内包する狂気に人の本能が怯えているのだと。

「おはようございます、姉さん。」

「うん、はやく朝食をたべたまえ。今朝の卵焼きは美味だぞ。」  
「いえ、申し訳ないのですが、御茶だけいただきます。」  
「！」

僕はその変化を見逃さなかった。

わずかだが、あやね姉さんのまばたきのスピードが加速した。

これは怒りのサインだ。

「じよ、冗談です。ご馳走になります、姉さん。」

「よいよ。無理はするな。あんなに飲ませた私が悪いのだから。」

「い、いえ！無理なんかしてないですよ！お、おいしいな、この卵焼き。」

「ほう。おいしいのか。」

あやね姉さんの絶対零度の視線が突き刺さり、僕の顔の筋肉の動きから嘘を言っていないかを計算している。

こつこつ時は自己暗示だ。

僕はいま腹ぺこだ。

飢えて死にそうなのだ。

胃からおぞましいものが逆流してきそうなのは気のせいだ。

おお、何と素晴らしい卵焼きだ。

甘さと塩加減の極上なハーモニーがたまらない！

「大変おいしゅうございます。わが姉ながら、このような至高の卵焼きをお作りになれるとは、世界の料理人が嫉妬しましょう。」  
「そうか、気に入ってくれて結構だ。今回はちよつと工夫してみたのだが、成功したか。」

あやね姉さんの鼻がわずかに動いた。

これは喜びのサインだ。

姉さん知ってますか。

あなたの視線は、人を壊せます。

「家族と一緒に食事を楽しむ。うん、人の幸せとは一切れの卵焼きからでも生ずるものなのだな。」

はい。

僕はいま五体満足なのが幸せです。

忘れもしない、というか、かなりトラウマな今年の春。

大学を卒業したが、就職先もなく、学校の寮にもそのまま住む訳にはいかない僕は途方に暮れていた。

ちなみに両親は、現在音信不通。

そんなピンチに救いの手を差し伸べてくれたのが、あやね姉さんだった。

姉さんは自分のマンションに僕を呼んでくれた。

大学四年間で、僕は平和ボケしていたのだろう。

あやね姉さんと普通の暮らしを送れるなんて、本気で信じていたのだから。

案の定、マンションに到着して早々、事件は起こった。

「利宗、これは何だろうか？」

「……な、何でしょうね。」

姉は僕のパソコンを開いて、静かに溜息をついた。

通常、他人のパソコンを勝手に起動させ、あまつさえ、エロに染まった検索履歴や中毒に近いネットゲームのプレイ時間を詮索するのはマナー違反だが、彼女には関係ない。

「ふむ、随分と素晴らしい学生生活を送っていたようだな。」

「いや、その、勤勉すぎた高校時代の反動といいますが、たまには怠惰に生きるのも違う世界が見えるかと思ひまして。」

「ほう、ヴァーチャルな世界で姉と不純行為にいそしんで、何かを悟れたかね。」

!!!!!!!!!!

それは僕が狂ったように、のめりこんだエロゲー「×××を×××してよ、お姉ちゃん」だった。

かなり変態な内容で、女の子が見たらドン引きなゲームだ。

「あの、ご覧になったのですか。」

「ああ、姉の×××を××××するシーンの閲覧回数が異常なことは、わかったよ。」

「いや、それはですね、」

「かわいいじゃないか。愛しい我が弟が、学業を疎かにしてまで、こんなことに心血を注いでいたとは。」

そう言うと、あやね姉さんは僕の左手をそっと握った。

「ね、姉さん!？」

それは、まさに天使のような笑顔だった。

どんな名女優だって、こんなに愛くるしい演技はできない。

どんなに偉大な俳優だって、役を忘れて恋に落ちるだろう。



「利宗、悪いな。これが私の性分だ。」

「ごくり。」

ああ、姉さんの指は冷たくて心地が良い。  
手を握られるだけで、こんなにも心躍るものなのか。

「申し訳ないとは思わないぞ、利宗。お前が私をこうさせたのだ。」  
「ひ、ひゃい。」

あなたの愚弟は童貞です。どうか優しく導いてください。

「いくぞ。」

そういうと、あやね姉さんは優しく僕の人差し指を握った。  
チューチューシャーベットをご存じだろうか。

管の真ん中から、ポキッと綺麗に半分に分れる氷菓子だ。

あの要領で、姉さんは僕の指を、あつてはならぬ方向に折り始めた。

「ぴぎやあああああ!!」

「大の男が、情けない声をだすな。次は中指だ。」

この一言を聞いて僕は失神した。

「むん。」

そんなことにお構いなく、あやね姉さんは指を手順よく折っていく。

「ぬきやうぶ!」

激痛で目を覚まし、同時にまた激痛で失神する。

彼女は黙々と小指まで折り続けた。

そして、最後にこう言い放った。

「利き腕の指を折らなかつたのは家族としての情けだ。これを機に心を入れ替えたまえ。」

僕は涙とよだれを垂れ流し、失禁しながら思いだした。

あやね姉さんは、マジでキレた時しか笑わないことを。

「」馳走様でした。」

そう言つと、姉さんは静かに箸をおいた。

彼女の食事はいつも長い。

しかし、今回はどうしたことか、過去最短記録を更新した。

こういう些細な変化に敏感でなければ、この家では暮らしていない。

「どうかしましたか、姉さん。」

「いや、私もさすがに飲みすぎたようだ。ついつい、弟と飲めるのが嬉しくて、羽目を外してしまったようだ。」

嘘だ。

僕は直感的に判断した。

そういえば、よくよく観察してみると、今日の彼女の様子には違和感を覚える。

ほんの僅かだが、今日のあやね姉さんの表情には何らかの感情が漏れ出ている。

こんなことは滅多にないことだ。

「ところで、利宗。」

いまわかった。

姉さんは、わくわくしている。

おそらく、朝から僕にあることを伝えたくて、ずっと我慢していたみたいだ。

こんな時は、間違いなく、とんでもない注文を突き付けられる時だ。

緊急回避あるのみ!!!

「あ!あ!あ!」

「どうかしたかね。」

「え、ええとですね。……きょうは……きょうはボランティア的なものに挑戦してみようと思うのですよ!普段から僕は思っておりまして。いい歳をして姉に養われ、ただただ無駄に時間を費やす日々。これでは、何のために、この世に生を受けたのかわかりません。母さんは悲しむでしょう。自分の息子は飯を食らい、それを排泄するためだけに存在しているなんて!父さんは嘆くでしょう。己の遺伝子は、この世に害悪しか残せなかったと。そんなのは、あつてはいけないことだ。だけど、僕は自分の存在意義を示せるほどの大業を成せるなどと思いがっちゃんいません。だから、ほんの少しでもいいのです。ほんの少しでも、自分の生きざまに納得できることがしたいのです!」

さあ押しきれ。

いつきに、まくし立てて逃げる。

躊躇したら、後悔じゃ済まないことになる。

席を立って、ネットカフェに直行だ。

鬼の目のないところで、あんなことや、こんなことを、やらか  
しちまうぜ！

「利宗、待ちなさい。」

「ごめん、あやね姉さん。話はあとでゆっくり聞くから。」

「・・・利くん。」

!!

いま僕のことを、「トシクン」と呼びましたか！

そ、そんな風に呼ばれたことなど、いままで一度もないぞ。

まさか地雷を踏んだか。

だとしたら、未曾有の危機だ。

我が家の場合、地雷は比喻ではすまない。

本当に両足ぐらい、もっていかれる。

「わたしは、どうやら君のことを過小評価していたようだ。いや、  
こんな言い方をする時点で、見下しているのだな。すまなかった。  
本当に申し訳なく思う。謝れば済むことではないが、わたしには謝  
罪することしかできない。こんな愚かな姉で、本当にすまなく思う。」

「はへ？」

「昨夜の君は、素敵だった。勇ましく、雄々しくあった。」

「ぼ、僕がですか。」

「思慮がたらなかったのだ。所詮は酒の席での戯言であると、君の決意溢れる発言の数々を、わたしは鼻で笑ってしまった。だが、今しがたの君の話を聞いて確信した。やはり利宗も、敬意を払うべき、<sup>つぐし</sup>士筆家の血をひいているのだと。」

「い、いやあ、良ければ、昨日のことは、そのまま忘れちゃってく  
れても……。」

「そんなことを言わないでくれ。やはり、怒っているのか？それは  
そつだ。男子たるものが、おのれの大望を侮辱されたのだ。いかよ  
うな罰も受けよう。」

おいおい、これはヤバイよ。

僕は何を言ったのだ。

場合によっちゃ、地雷じゃ済まないぞ。

「利宗。早速だが、携帯にメールが届いていたぞ。早く返信したほ  
うがいい。彼も忙しいからな。さあ、君の存在の全てをかけて、昨  
日宣言した通り、彼奴を撃滅してやれ。」

そう物騒なことを言うと、あやね姉さんはテーブルの上に、僕  
の携帯電話をおもむろに置いた。

メール？

僕の携帯に？

自慢じゃないが、僕にはメールをやり取りするような友人はい  
ない。

大学時代、少ないながらも、友達はいた。

だが卒業した後もかまってくれる親友を、ぼくは作れなかった  
ようだ。

結果として着信履歴には、姉の名前しか表示されない日々が続



ということとは、僕から先にメールを送信したはずだ。

「どうだ、利宗。彼はどう言ってきたかね。」

「あ、いや、ちよつとこの人疲れているのかな。」

「まあ、ストレスで命を削る職業をしているからな。」

あやね姉さんは僕の隣に座り、携帯の画面を覗き込んできた。

「ほう。いいじゃないか。ゾクゾクしてくる文面だ。」

姉さんウキウキしないでください。

僕は、このままだと生きてままだらばらにされて冷蔵庫に詰められて、脳みそなんかソテーにされて食われそうですよ。

とにかく、僕は失礼なメールを送り、相手をかなり不快にさせたようだ。

送信履歴をチェックしてみよう。

以下が送った内容だ。

鷲頭 真様

謹啓 はじめてお便りを差し上げます

突然の失礼をお許しくださいませ。

連日の炎暑ではございますが、ますますご壮健でご活躍のこととお喜び申し上げます。

さて、このたびの支持率の調査結果がとうとう20%を割られになりました。

わがことのように大変喜ばしく思います。

思い返せば、数々のスキャンダルに失言、無責任な公約と増税発言。

毎日テレビにてご尊顔を拝見するたびに、なぜ国民の皆様が心穏

やかでいらつしやられるのか、無知なわたくしには理解に苦しむ日々を過ごしております。

そこで大変恐縮ではあるのですが、先生のお顔をぶん殴り、可能でございましたら、ちよつとした顔面崩壊にさせていただきますたく御手紙をさし上げました。

・・・ていうか、殴らせる。

黙って殴らせる。

一生モノが食えなくなるまで殴らせる。

ますます厳しい暑さが続きますが、くれぐれもご自愛くださいませ。

謹言

20XX年 7月15日

土筆 利宗

ま、まあ丁寧でいいと思うよ。

ちよつと後半は失礼だったかな。

そりゃ、いきなり殴らせるとか言われたら、誰だってキレちゃうよね。

どついうわけで、鷺頭真さんに僕が喧嘩を売ったかわからないけど、謝れば許してくれるぞ。

ていうか、誰だろ。

鷺頭さん。

すぐく、聞き覚えのある名前だけど。

「姉さん、鷺頭さんて人、知ってる？」

「ふふ、わたしをからかうなんて、余裕じゃないか。」



「いやいや、ふざけてないよ。もうちよっとで思いだせそつなのだ  
けど。」

「わかった。わかった。余興につきあおう。」

「じゃあ、教えてください、姉さん。」

あやね姉さんは、とても悪戯っぽい目で、心から嬉しそうに、  
ゆっくりと、その名を口にした。

「我が国の第96代内閣総理大臣、だ。」

く  
く  
く

## 第二章 男子の一言、金鉄の如し

総理大臣。

日本の行政における、最高権力者。

僕はその人から「死ぬ」と言われてしまった。

ありつただけの憎悪をこめて。

「君は、鷲頭に喧嘩を吹っ掛けたのだよ。」

あやね姉さん、何をおっしゃっているのか、わかりません。

「昨夜、自分で言ったではないか。責任とは、罪悪とは、痛みを伴わなければならぬと。」

そんな無茶なことを言ったのか、僕は。

「君は、自らを取り巻く全てを否定していた。どうして、こうなる。どうして、こうならない。どうして、こうでなければならぬ。自分は悪くない。何故、悪い。真つ当に生きているだけだ。真つ当に生きて幸せになれないのであるなら、この世界はクズだ。在り方を間違ったのだ。」

……その通りだ。

その超自分中心な考え方は、間違いなく、ぼくのものだ。

この恥ずかしい話を、酔ったぼくは、延々としゃべり倒したのだ。

常識のある社会人は、こんな稚拙な話を相手にしない。

白い目でみて、唾棄しておわり。

当たり前だ。

だが、あやね姉さんは真摯に向き合ってくれたのだ。弟の哀れな愚痴に付き合ってくれたのだ。

しかし、あの時、泥酔した脳みそでも疑問がわいた。

どうして、馬鹿にしない。

尋ねると、姉さんは当たり前のように言ったのだった。

「そんなことは、誰もが一度は抱く想いだろう。何故、それを他人が口にすると侮蔑しなければならぬ？」

姉はこういう人だ。

だから、どんなに無茶苦茶で、破天荒で、怖くても、ぼくはこの家を出ないのだろう。

そして酔いが頂点に達した頃、深夜のテレビニュースが始まった。

そこに映し出された鷲頭真を見て、思ってしまったのだ。

この人は、日本の総理だ。

ぼくの世界を動かしている、「一番大きな歯車」だ。

世界が動作不良を起こしているのなら、「一番大きな歯車」を叩いてみれば、どうだろうか。

壊れかけの古時計も動きだすかもしれない。

「姉さん、ぼくは総理を殴りに行ってきます。」

もしあなたの弟、もしくは家族が、そんな馬鹿げたことを言いだしたら、どうするだろう。

僕だったら、そいつの手足を縛りあげて病院へ連れていく。

そして医師は告げるだろう。

「残念ながら、手遅れでした」と。

だが、あやね姉さんは違った。

僕の携帯を受け取ると、あるメールアドレスを打ち込み始めた。

「これが、鷺頭のプライベート用のアドレスだ。思いのたけを伝えるがいい、利宗。」

「・・・ヒック、・・・ありがとうございます、姉さん。」

そして、ぼくは、あの挑戦状を総理本人に送ったのだった。

もちろん、こんなのはジョークだと思った。

後で、笑い話になるだけだと思った。

だって、信じられます？

一般人が総理とのホットラインを持っているなんて。

ありえないでしょう。

しかし悔やまれることに、あやね姉さんは、ありえないことを普通に実行できる存在だった。

「ちょうど、我が同志が最近、鷺頭とメアドを交換してな。彼女は舞妓なのだが、しつこく迫られてウンザリしていたよ。」

と、後に情報源を明かしてくれた。

さて、そろそろ、この摩訶不思議な姉について、ちゃんと説明すべき時が来たようだ。

職業、「革命家」。

マジです。

一般的には、無職ということにはなっているが、本人がそう言い張るのだからしょうがない。

毎朝八時になると、普通のOLの恰好をして、

「作戦行動にはいる。」

と言葉を残し、家を出る。

長い時は、一週間くらい帰って来ない時もある。

ある日なんか、両手に大きなアタッシュケースを持って帰ってきたことがあったが、堂々と僕の前で開けると、その中には見たことのない量の札束が入っていた。

かといって、それを個人で使うつもりは無いらしく、我が家の質素な食事に、おかずが一品増えることもなかった。

また、見るも無残なボロボロの姿で帰ってきたこともある。

気のせいであって欲しいのだが、とても火薬臭かったのを覚えている。

コートに小さな穴が無数にあいていたが、見なかったことにした。

しかし、防弾チョッキのようなものを床に放り投げ、確実に人の命を奪える大きさのナイフを何本も研ぎ始めたのには、声も出なかった。

ちなみに、枕の下に拳銃を隠しているかは、怖くて確認できていない。

「それで、今から実行しに行くのかね、利宗。」

二日酔いで頭がズキズキする。

幻聴が聞こえたかな。

恐ろしいセリフを、姉が口にした気がするが。

まさか、本当に殴りに行かせないですね。  
ぼくは、人畜無害が取り柄の、小さな人間ですよ。

「……いや、あの……」

「わかっている。初めての任務は、誰でも不安になるものだ。わたしにアドバイス出来ることがあるなら、何でも聞いてくれ。」

マジだ。

本気で実行させようとしている。

ヤバいぞ。

なんとかしなければ。

冷静に考えろ。

………ダメだ。

姉さんに嘘は通用しない。

なら謝るしかない。

誠心誠意、謝罪するのだ。

「姉さん！」

誰もがうつとりするような、芸術的に完成された土下座を、ぼくは披露した。

数少ない特技の一つだ。

激痛が走るくらい、床に頭を擦りつける。

額に血が滲めばベスト。

肩を縮ませ、お尻を少し上げる。

背中を斜辺とした、直角三角形を形作るのだ。

ピタゴラスの定理から、わずかでも外れてはならない。

「何をしている、利宗。」

「本当に、申し訳ございません。」

「なぜ、謝る。」  
「ぼくは、酒に酔って出来もしないことを言いました。」  
「出来もしないこと？驚頭をなぐることか？」  
「はい。どうかしていたのです。」  
「何故、できないとわかる？試みたことが、あるのかね。」  
「いえ、ありません。」  
「では、やってみれば良いではないか。」

姉さん、怒っているのですか？

そつと、あやね姉さんの顔を覗いてみる。

怒りの気配はないようだ。

しかし、もっと顕微鏡で覗くように、細心の注意を払って、表情を読み取る必要がある。

この姉さんの感情は何だろう。

焦り？

これは焦りだろうか？

「利宗。」

「はい。」

「わたしは君の姉だ。昨晚の君の言動に嘘偽りが無いことは、わかっているつもりだ。」

「はい。」

「だが、心がそれを求めているにもかかわらず、不可能だから、無理だから、と自分の気持ちを拒絶するのかね。」

「正直、実現できるかどうかは、姉さんの言った通り、やってみなければわからないでしょう。」

「うむ。」

「でも、それでも、ぼくには殴れません。」

「なぜ。」

「失いたくないからです。平穩を。安寧を。静謐を。」

「それらが、心の在り方より重要だと？」  
「はい。」

これが、ぼくの本心だ。  
普通に暮らしたい。

そりゃ、世界に文句を言いたい時もある。  
でも、自分を騙だまして、騙して、騙し続けて、心が壊れるまで己おのれを欺あざむき続けるのが、生きるということじゃないのか。  
糞くそっ食らえなことだが、それが普通に生きるための術なのだ。

「利宗、君は………いや、もう弁舌は  
尽くしたか。」

そう言つと、あやね姉さんは、淋しそつに隣の和室に向かつた。  
気のせいかな？

瞳が潤んでいたようだが。  
まさか、泣かせてしまったのか。

あまりの弟の不甲斐なさが、彼女を悲しませているのか。  
だが………これで、いいのだ  
しょうがないじゃないか。

ぼくは、姉さんみたいに強くはない。  
人には、それぞれ分相應の生き方があるのだ。  
憤ましくも、ちよつと変な姉と平和に暮らすのが幸せと感ずる  
ことに、嘘は無い。

「待たせたな。」

30分くらい経つただろうか。  
姉さんがリビングに戻ってきたようだ。  
目が赤く腫はれていた。



「和室に来たまえ。」

隣の部屋に入ると、そこには異様な光景が広がっていた。  
畳に敷き詰められた、白い布。  
燭台しょたいの上で、ろうそくが怪しげに灯っている。

その中でも、一番の妖気を放っているのが、白鞘の短刀だ。  
小さな台の上に置かれた短刀の鋭い光は、それがレプリカでないことを如実に物語っていた。

これは、あれですか？

時代劇でよく見る、あれですか？

お腹を切っちゃうヤツですか？

「安心しろ。介錯は初めてだが、人を斬るのは慣れている。」

ちよつと待つて。

状況がうまく飲み込めない。

どこから、この流れになった。

「それと、これに着替えるのだ。」

白い和服を渡された。

袴かみしもというやつだ。

「ちなみに、土筆家つくしでは十文字腹という作法をとっている。」

「十文字腹？」

「まず、短刀で腹を横一文字に裂き、次に、鳩尾みぞおちからヘソにかけて縦一文字に裂く。内臓を左手で引きずりだしたら、天高く掲げる。」

逃げる！

もう、何が何だか、わからないが！

今は逃げる！

逃げ足に限っていえば、ぼくは超一流だ。

もし陸上競技に「逃げ足」の種目があれば、今頃は金メダリス  
トだ。

ぼくの走りに世界が驚愕するだろう。

驚異のスピードでリビングを抜けて、玄関まで疾走する。

そして、玄関のドアノブに手をかけた瞬間、

ドン！

閃光がぼくの頬をかすめて、ドアに突き刺さった。

それは、姉愛用のスロージョウロウダガーだった。

「わたしに弟殺しをさせるつもりか。」

ゆっくりと、あやね姉さんが歩み寄ってくる。

忘れていた。

ぼくは逃げ足の金メダリストだが、所詮はアマチュア。

彼女は、狩る側のプロだ。

チーターだって、武装したハンターには敵わない。

「姉さん、一体どうしたのさ！？いつも普通じゃないけど、今日は  
常軌を逸している！」

そう。

365日変人な姉だか、今日だけは、変じゃ済まされない。

姉さんは凶暴だ。

お仕置きと言って、軽い拷問だって平気でする。

だが、彼女なりのルールはある。

武器だけは、絶対ぼくに向けない。

武器を手にするということは、相手の生命に対して敬意を払わないという意味表示だからだ。

「それは、わたしが聞きたい。なぜ逃げる。いや、どうして逃げられる。」

「当たり前じゃないか。死にたくないもん！」

「……やはり、解せんな。死はすでに覚悟しているものかと思つたが。」

「そ、そこだよ！いつ僕に死亡フラグが立ったのさ！」

「気は確かか。」

「ずっと姉さんよりかは、正常だよ！」

「……もしや、もしかだ。父上から何も聞いていないのか。」

「と、父さんから？」

「土筆家の掟についてだ。」

掟？

わからない。

どういう意味だ。

その時、ぼくの脳みそは、はるか過去の記憶まで遡っていた。  
遠い夏。

水田が無限に広がる緑の地。

古びた武家屋敷。

ぼくの実家だ。

居間で家族四人、冷たいスイカを、美味しく食べている。

父は饒舌家で、くだらない冗談を言つては、沈着な姉さんに説教されている。

そして、優しい母さんは父を慰める。

こんな幸せに満ちた空間の一角に、あれは大事に飾られていた。

掛け軸だ。

ただの掛け軸ではない。

おそらく土筆家の根源であり、本質的な自己規定そのものなのだろう。

それには、達筆な字で、こう書いてあった。

「男子の一言、金鉄の如し 武士に一言無し」

### 第三章 土筆利晴

土筆家の歴史は古い。

戦国時代には、武をもって家名を上げ続けた一族だ。時の当主、土筆利晴は徳川家康に仕えていた。

実は、利晴さん、かなり問題のある人だったらしい。

あの本多忠勝の名槍「蜻蛉切り」が羨ましくてしょうがなかった彼は、忠勝に執拗に迫ったという。

「ねえ忠勝くん、蜻蛉切り、ちょうだい。」

「と、唐突に無茶をいうな、利晴。」

「だってさ、カッコイイじゃん。織田の奴らもウワサしてるよ。」

「うむ。確かに、この槍ならば如何なる猛者も討ち取れよう。」

「いいね。いいね。だからさ、ちょうだい。」

「いやだ。」

「そこをなんとかさ。」

「無理。」

「御頼み申す。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あ、ちょっと、無視とかやめようよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ムツカアアアアアアアアアア!!

ブチギレた利晴は、槍を奪うと、柄を真っ二つに叩き割ったという。

こんな彼だが、家中はおろか、家康からの信頼も厚かった。なぜなら、彼は絶対に嘘をつかないから。

それは下剋上が当たり前のこの時代において、あり得ない存在だった。

だから、家康は重用したし、仲間からも慕われた。

数年後。

かの有名な長篠の戦い決戦前夜のことだった。

軍議から帰った家康は少々やつれた様子で利晴につぶやいた。

「はあ……もう、いやじゃ。」

「どうしたの？殿？」

「利晴か。また信長様が無理な要求してきたの。」

「また信ちゃんが？」

「此度の合戦は鉄砲で武田を殲滅することじゃ。じゃが、我が軍の鉄砲の少なさに信長様がご立腹で……あと300丁を明日までに用意しろとのことじゃ。」

「うわぁ……。さすが駄々っ子信ちゃんだね。」

「どうしたものか。」

「でも、殿。鉄砲なんて複雑で使い方がよくわからないし、そんな大量にあっても、ぼくら扱えませんよ。」

「わしも、あれは苦手じゃ。」

「だったら殿、ぼくらで武田勝頼の首を獲ったら、信ちゃんも文句言わないかな。」

「そりゃ、そうじゃが。」

「敵が織田の鉄砲で混乱している間に、ぼくが勝頼をやっちゃいますよ。」

「そ、そんな無謀な……。」

「大丈夫、大丈夫。明日のぼくの星座占い、最高らしいし。」

「せ、星座占い？」

「ただし、ラッキーアイテムが蜻蛉切りなので、忠勝くんに殿から言っておいてね。」

そう言い残すと、利晴は上機嫌に家康のもとを去った。

合戦当日。

大音響と鉛なまりの嵐のなかで、武田騎馬軍団は総崩れとなっている。その大混乱の最中、異様な大槍たすきを携えた鎧武者が次々と敵武將を討ち取っていった。

土筆利晴である。

その勢いは凄まじく、武田本陣に肉薄しようとしている。

普段おつとりした雰囲気の利晴は、戦においても、その性格は変わらなかった。

まるで挨拶をするかのように無防備に敵に近付き、一瞬のうちに相手の首を狩る。

槍は鞭の如くしなり、次々と無残な生首が宙を舞う。

まことに、天から血の雨が降るのである。

そんな地獄絵図のなかを、利晴はへらへらした顔で、散歩でもするかのように進むのである。

武田兵士は彼を畏怖し、こっぴ呼んだ。

「狂槍」と。

「ええと……あなたが勝頼さん？」

顔を帰り血で真っ赤に染め上げてニコニコ笑いながら近づいてくる利晴は、まるで幽鬼そのものであった。

「う、うわぁ！化け物だ！」

勝頼の護衛達が悲鳴をあげて立ちすくんでいる。

彼らとて歴戦の猛者だが、その男たちでさえ、利晴の前では動くことさえできない。

「き、貴様！何者だ！」

さすが勝頼は一国の主である。体中に鳥肌を立たせながらも、威厳を保とうとしている。

しかし、腕が震えて、うまく刀を鞘から抜くことができない。

「心外だなあ。化け物だなんて。ちょっと傷つくよ。……とにかく勝頼さん、殿が怒られるから、どうかあなたの首をください。」

時が止まったかのように誰もが硬直しているなかを、悠々（ゆうゆう）と勝頼に近づいた利晴は大槍を常人離れたスピードで振り下ろした。

その刹那。

「ありや？」

その場にいた全員が我が目を疑った。

利晴が蜻蛉切りを振り下ろした瞬間、その柄が真ん中から真っ二つに折れ、槍の先が彼方へ飛んで行ってしまったのだ。

もちろん原因は、過去に利晴が蜻蛉切りを壊したからだ。

その後、補強と修繕がなされたようだが、今回の激戦でついに限界を迎えたらしい。

「に、逃げろおおおお！」



我に返った勝頼たちは、蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

「ちよ、ちよ、待って！……え？……え？……え？……え？……うそでしょ？」

「そ、それで、どうしたの？利晴さん。」

「土筆家の掟を叫び、その場で切腹したそうさ。」

「！！！！！！」

急に姉さんが我が家の歴史を語りだしたのを不思議に思ったが、いま納得した。

「つまり、武士に一言無しってよくいうけど、あれって土筆家が発祥なの？」

「その通りだ。忠臣を失った家康公は、三日三晩泣き通し、その後、利晴さまを褒め称えて土筆家の掟を家臣に広めたという。」

「でも、今は平成の世だよ。本気で切腹しなくちゃいけないの？」

「利清おじい様を覚えているか？」

「うん。三年前に事故で亡くなったよね。」

「割腹なされたのだ。」

「！！……マジ？」

「ああ。見事な最後であった。」

どうやら、掟からは逃れられないらしい。

こんな、おぞましい家系だったとは。

ならば。

ならば、やるしかない。

総理を殴りに行く。

つづく

## 第四章 総理とキリン

エロ本を読む。

男なら、誰だって経験あるよな。

無論、俺だって読む。

今年で68歳になるが、文句あるか？

ジジイだって、見てえモンは見てえんだ。

高齢化社会だぜ？

年寄りが元気で結構じゃねえか。

別に、誰に迷惑かける訳でもねえしさ。

だがよ。

俺は職業柄ちよっと、こういったブーツを買いには行けない。

部下に頼むこともできない。

じゃあ、どうするか？

拾ってくるんだよ。

この国の美点は、エロ本が道端に落ちていることだ。

ジョギングがてら、ゴミ拾いと称してお宝を回収する。

だが残念なことに、大抵は保存状態が最悪だ。

袋とじが無事なケースなんてのは、まず無い。

でもよ、稀まれにミラクルなことも起きる。

新品同様のエンジェルに出会っちゃった。

思わず叫んだね。

ていうか、嬉しくて涙が出てきた。

だって、袋とじが開けられるんだぜ？

この世には、エロ本の神様がいるのかもな。

もし神社があるなら毎日だってお参りにいくぜ。

だが、まだ難関が待っている

俺の場合、ちよっと職場環境というか、居住環境が特殊でな。  
いわゆる住み込みだよ。

仕事とプライベートの境界線が曖昧なわけだ。

しかも部下どもが昼夜問わず出入りしてきやがる。

そんな条件下でハニーと戯れるのは至難の業だ。

それでも、奇跡的にチャンスが巡ってくることもある。

サンキュー、エロ本の神様。

そんな時に。

そんな時にだ。

突然、携帯がなったらどうする？

ビビるよな。

別に悪いことをしているつもりはないが、やっぱり焦るもんだよな。

俺は急いで携帯を開いた。

そしたらよ。

いたずらメールが届いてやがった。

キレたね。

今年で一番キレたね。

記憶が飛んじまうぐらいブチギレたよ、俺は。

気が付いたら、粉々に朽ち果てた携帯が床に散らばってたもんだ。

「総理、そろそろお時間です。」

もう時間か。

秘書官よお、そんなに俺を急かすな。

嫌なことを思い出して、気分が悪いんだ。

「早く公邸に戻らないと、また注意されますよ。」

わかった、わかった。

うるさい奴らが帰って、やっとゆっくり食事できるのによ。

低能議員共との会食とか、つまんねえよ。  
ていつか料亭が飽きたわ。

二万払っても、全然食った気がしねえ。

明日はステーキ食いてえな。

「おい、加藤。明日はステーキ予約しとけ。」

「し、しかし明日は須藤議員との会食を予定しておりますが。」

「知らねえよ。鉄板焼きに須藤を呼べや。」

「そ、そついう訳には・・・。」

「こちとら、朝から汗水垂らして無能共のケツを拭<sup>ぬぐ</sup>ってるんだぜ？  
夕食ぐらい好きにさせろや。」

「わ、わかりました。至急予約をとります。」

全くなつちやいないぜ。

やつぱり、こいつも使えねえな。

俺様が食いたいと言ったら、国家命令なんだよ。

反逆罪でしばくぞ。

ケツ毛野郎が！

夏真つ盛りだな。

街路樹のまぶしい緑から生命の息吹を感じる。

この季節は、あらゆる生物が力強く輝いているから好きだ。

俺の性欲も尋常じゃないくらい高ぶっているが。

本当はこのまま車から降りて、どっかの水着のお姉ちゃんと夏  
を満喫したいぜ。

だが、現実は今も仕事だ。

なんでも「ハローワーク」という所を視察せにやらんらしい。

めんどくせえ。

「総理、そろそろ到着します。」

「おう。ところで加藤、ハローなんたらって何だ？やけに楽しそうな名前だが。」

「……そ、総理、昨日お渡しした資料をお読みになられなかったのですか？」

「いいから説明しろ。その方が早いだろ。」

「は、はい。公共職業安定所のことです。国民の皆様にご紹介することにより、安定した雇用機会を提供するための施設でございます。」

「つまり、あれか。無職の負け犬が惨めに仕事を探す場所か？」

「そ、そんな言い方は……。」

「うるせえ。けどよ、そこに行つて俺に何の得があるんだよ？あんな底辺の糞共は投票にも行かねえだろ。」

「我が国の雇用問題は深刻です。視察することにより、この問題に取り組み姿勢をアピールするのが目的です。」

うぜえ。

落ちこぼれ共のご機嫌取りなんぞ、したくねえ。

お？

着いたか。

随分と立派な建物じゃねえか。

カス共にや、もつたいなくねえか？

この国は間違っている。

全てを国や社会や金のせいにして、腐っている生ゴミに税金なんぞ使わせるか。

「楽しんで稼がせろ。」

「肉体労働は嫌だ。」

「もっと相応しい仕事をくれ。」

「自分は特別なのだ。」

ふざけるな！

そんな奴らは、この国にはいらねえ。  
今すぐ出ていけ。

俺は貧しい農家の生まれだ。

俺は、必死に勉強した。

他の馬鹿どもが呆<sup>ぼう</sup>けている間も勉強をした。  
ケツから血に染まった糞を垂らしながらな。

全ては、底辺から這い上がるために。

政界には一切のコネもなかった。

だから、嫌な奴にも頭を下げまくり、誰もが避ける仕事をやり  
まくった。

人には言えないようなことにも手を染めた。

それでも、親から全てを受け継いだ二世議員共には到底及ばな  
かった。

地獄だぜ？

もがいて、もがいて、出来うる全てのことをやり尽くしても報  
われない。

この世界を恨んだかつて？

まさか。

平等、自由、保障、公正。

俺は、この目でそんなものを見たことがない。

馬鹿が勝手に存在を信じ込んでいるだけだ。

俺は何も期待しない。

期待出来るかよ。

力、智、金、血、運。

それが全てだ。

だが俺には「運」があった。

ある有力議員に目をかけてもらえた。

そうなりや、こっちのものだ。

やっとスタートラインに立てたのだ。

同じ土俵の上なら、誰にも負けるつもりはなかった。

敵は欺き、騙し、蹴落とした。

どいつもアマちゃんばかりだった。

月並みな言い方だが、生きることには闘争だ。

アホは武装せず戦場にやってくる。

馬鹿は自分の武器が何なのかさえ知らない。

間抜けは、誇らしげに自慢のライフルを披露してみせる。

「僕は資産家だぞオ。札束で殴り殺すぞオ。」

「阿呆が。自分の武器を敵に教えてどうする？死ね。」

バキーン！

どんなに高性能なライフルを装備していようと、それを扱う技能がなければ敵ではない。

俺が幼いころから培ってきた経験や知識は最強の兵器となっていた。

歩兵をティーガー戦車で轢き殺すようなものだ。

たまには強敵も現れたが、その頃には俺の部下も増えていた。

人海戦術で囲い込み、88mm砲でぶち殺した。

地獄に叩き落とした奴らの数なんか忘れちゃった。

俺の背後には屍の山がうず高く積み重ねられている。

気づけば、いつの間にか今の地位に立っていたのだった。

俺は総理大臣になっていた。



ハローワーク内はやけに涼しい。

ドブネズミ共にはクーラーなんぞ必要ねえ。

いや、こいつらの陰気だとか負のオーラがうすら寒いのか。

目の前には、背後から俺の出現で緊張してガチガチになった若造がいる。

カウンターで職員から求人案内を受けているようだ。

やたら背が高くせに、腕は驚くほど細い。

典型的な草食系だな。

たとえるならキリン。

髪を中途半端に伸ばしていて、表情を覗くことが出来ない。

就職したいなら、まず床屋に行きやがれ。

「そ、総理。」

秘書官の加藤が冷や汗を流しながら、耳打ちしてきた。

「ん？なんだ、加藤。」

「睨みつけてないで、話しかけてください。」

「別に見学してりゃ、いいんじゃないやねえ？」

「駄目ですよ。そんな怖い顔でガン見したら、印象悪すぎます。」

だって、このキリン野郎、俺様が視察してやっているのに挨拶の一つもしやがらねえからよ。

「フ、フレンドリーに優しく接してください！」

わかったよ、加藤。  
一応、有権者様だからな。

「こんにちは。暑い中、大変ですね。」

丁寧、丁寧、俺はしゃべりかけた。

これが、俺の外面ソートだ。

当たり前だろう？

品格は大事だからな。

「・・・・・・・・」

キリン野郎は無視をきめやがった。

テレビ中継のスタッフがいなかったら、ケツにボールペン刺してたぜ。

「仕事を探しに来たのですか？」

この俺の発言が後に問題視される。

緊急救命室に運ばれた患者に「あなたは死にそうですか？」と尋ねるようなものと批判されたのだ。

じゃあ、何を話せば良いんだよ？

クソツタレ。

「このような雇用情勢では苦勞が絶えないと思いますが、我々も全力で改善策を練っております。どうか、もうしばらく堪えてください。」

自分のセリフに吐き気がしてきたぜ。

何か話せよ、もやし野郎。

「あ、あの……驚頭総理。」

やっと、しゃべりやがった。

だが、こいつは馬鹿か？

総理大臣に背中を向けたまま、話し始めた。

正気か？

「い、ごめんなさい！」

謝ると同時に、若造は突然立ち上がった。

ちよつと目つきが異常だぜ？

お、おい！

ちよつと待て。

そのリュックから取り出した、でかいビニール袋は何だ？

液体がパンパンに詰まっているぞ。

マ、マジかよ。

それをどうするつもりだ！

バツシャアアアアン！

「ほ、本当にすみません！驚頭総理！でも、こうしないと僕の命がないのです！」

「この野郎！何をぶっかけやがった！」

「安心してください！ただのローションです！害はありません！」

そう言つと、キリン野郎は俺のネクタイを掴んで走り出しやがった！

それも全力ダツシュで。

ギリギリと首が締められる。

ローションまみれの俺は簡単に押し倒された。

そして、仰向けの状態でハローワークの床の上を猛スピードで引きずり回される。

まるで築地の冷凍マグロのように。

や、やべえ。

これ拉致じゃねえ？

テロじゃねえ？

「てめえ！ふざけるな！殺すぞ！」

「あ、あなたも姉も簡単に殺すとか言わないでください！」

「顔覚えたからな！マジで死刑だぞ！」

「ひいいい！」

うわ！

さらにスピードが速くなった。

こいつ人間か！？

まるで怒り狂った闘牛のように、ロビーを爆走している。

おい！

ウソだろ？

階段が見える。

確かここは三階だ。

このまま降りるつもりか？

俺死ぬのか？

ガン！ガン！ガン！ガン！ガン！ガン！ガン！ガン！ガン！ガン！ガン！ガン！ガン！ガン！ガン！ガン！

「ぶぎやあああああああああああああ！！！」

後頭部が固い階段に叩きつけられる。

幾度も幾度も。

……あれ？

気持ちよくなってきた。

それに暖かい。

俺の腹の上には、小指くらいの大きさの親父とお袋が立っている。

亡くなる前と変わらず、仲良さそうに手をつないでやがる。

見ているこっちが恥ずかしいぜ。

小人の親父が、にこやかに語りかけてくる。

だが声が小さくて聞き取れない。

もうちょっと大きな声で話してくれないか。

俺も自慢したいことが山ほどあるんだぜ？

## 第五章 追跡戦はおっぱいと共に

前代未聞だ。

総理が拉致された。

彼の近辺警備をする警護第一係始まって以来の大事件だ。

早急にテロリストに追いつかなければ。

唯一の救いは、単独犯であり、徒歩で逃走していることだ。

「た、田鎖<sup>たくさり</sup>さん！待ってください！！！」

新人の春川が遅れてきている。

「急げ、春川！一秒でも遅ければ、総理の命は無いものと思え！」

彼女は小柄で、とても警護課の人間とは思えない。

保育士が似合いそうな、温厚な女性だ。

だが、その身体能力はズバ抜けている。

少なくとも、この追跡についてこられるのだ。

他の男性課員でさえ、俺の脚力には到底及ばず、はるか後方を走っているというのに。

「あ、あのテロリストは改造人間ですよ！きつと！」

「無駄口を叩くな！今は追いつくことだけを考える！」

「だって田鎖さん！あんなスピード、人間じゃ無理ですよ！車じゃないと追えませんよ！」

「応援は要請済みだ！それに、こんな細い路地、車では追跡できん！」

すでに犯人の姿を見失っている。

地面に残るローションの後だけが手掛かりだ。

しかし、これは罠の可能性が大きい。

奴は一体何者なのだ。

護衛に関して日本で最高の實力を持つ我々の目の前で総理を連れ去り、さらに逃走に成功しようとしている。

無論、奴が犯行に及んだ瞬間に屈強な課員達は犯人を取り押さえようとした。

対テロ対策の一環としてCQC（近接格闘術）をマスターした猛者達が華奢な体格の犯人を圧殺してしまわないか心配したほどだ。だが奴は嘲笑うかのように一切反撃もせず、全ての攻撃をいとも簡単にかわした。

しかも総理を引きずりながら。

プロ中のプロ達が指一本触れられなかったのだ。

間違いなくテロリストは、高度な訓練を受けたエキスパートだ。

「春川、いつでも発砲出来るようにしておけ！」

「え？え？無理ですよ！」

「グダグダ言っている暇はない！拳銃でも奴は止められないかもしれないのだ！」

「わ、わかりました！」

ん！？

上空の探索ヘリから無線だ。

見つかったのか！？

「こちら田鎖！」

「標的発見！繰り返す！標的発見！」

「位置座標を端末に送ってくれ！」

「了解！」





この距離からの銃撃を避けやがった！  
春川の照準に狂いは無かったはずだ。

「な、な、何をするんですか！！」

犯人が大声で喚わめいた。

しかも泣きながら。

「危ないでしょう！！死んじゃうでしょう！！」

いや、今のは普通死んどけよ。

「あなた正気ですか！！ほら！ほら！壁にこんなに穴が空いてるじゃないですか！」

くそ！警棒で叩き殺す！

格闘戦なら俺は世界でも屈指の実力の持ち主と自負している。

一気に間合いを詰め、頭部めがけて容赦無く警棒を振り下ろす。

「せいっ！はっ！」

一振り目の攻撃はフェイントだ。

敵が回避する隙にさらに接近し、超近距離にて肘打ちを放つ。

「ふん！」

このエルボーを避けるのは物理的に不可能だ！

「ちよっ！うわっ！ひゃあ！」

馬鹿な！

映画のワイヤーアクションのように、犯人は必死の形相で後方へ大きくジャンプする。

必殺の二連撃をテロリストは超人的なフットワークでかわしたのだ。

ならば。

「ちえええい！！」

再び近づき、敵の足めがけて横一文字に警棒で下段斬り。突然の下段への変則攻撃は、避けられるものではない。

「うへやああ！！」

まるでマンガだ。

奇声をあげながら、またジャンプして回避するのだ。しかも人間離れの跳躍力で。

真剣な俺がとてモアホらしい。

そして、そのまま奴は・・・おい！何のつもりだ！

犯人は空中でバランスを崩し、オレめがけて落っこちてきた。

奴はこれを狙っていたのか！

フライング・ヘッドバッドが俺の頭頂部に炸裂する。

ゴキン！！

「ぐはあ！！」

「ぐ、ぐめんなさい！！」

こいつは危険だ。

もう我々の手に負える相手ではない。

重装備のレンジャー部隊でもなければ、この怪物は止められない。

春川、頼む。

早く報告しなければ……。

くそ、意識が遠くなってきた……。

……。

何てことなの！

まるで悪夢のようだわ。

あの田鎖さんが、たったの一撃で倒れるなんて！

「りよ、両手をあげて降伏してください！」

ダメ！

拳銃を構えたものの、震えで照準が定まらない。

けど、もう私しかないのだから、怯てられないわ。

「あの……違ってます、お姉さん。こんなつもりは……なかつた。」

犯人が、まるでゾンビの如く立ち上がる。

グニユ

その足は田鎖さんの顔面を踏みつけて、こちらに向かってくる。

鬼だわ。

何て奴なの。

「止まりなさい！」

「あ！ごめんなさい！」

グリッ

後退する足で、また田鎖さんを踏みにじる。

まるで嘲笑あざわらうかのよう。

「その人は気絶しているのよ！それ以上危害を加えないで！」

「うわ！ごめんなさい！踏んでた！すみません。頭がクラクラしてて・・・」

こんな冷酷非道なひと初めてだわ。

「そ、それより！お姉さん、驚頭総理を助けてください！」

「あなたが拉致したのでしょ！」

「いや、だって、こんなことになるなんて！」

そこには、原型を留めないほど顔から後頭部にかけてポコポコになった総理が横たわっていた。

「ひ、ひどい・・・。」

「本当にすみません。いつの間にか、こんなになっちゃってて。」

おそらく酷い拷問を受けたのだろう。

体中にも痣が目立つ。

「トウヒャン、カアヒャン、・・・ホレハホウリナンドゼ・・・。」

！

良かった！

総理はまだ生きています。

最悪の事態は免れた。

「・・・ヒホナイテイヘラインダゼエ・・・。」

しかし、様子がおかしい。

まさか。

「まさか、総理を薬物で拷問したの!？」

「ち、違います!連れてくる途中で色んな所にぶつけちゃったみたいで・・・。」

嘘よ。

最低だわ。

肉体的苦痛を与えるだけでは飽き足らず、精神的にも破壊しようとしたのね。

「そこから一步も動かないで。この距離からなら、あなたを射殺する自信があるから。」

「は、はい!」

まずは総理に正気に戻ってもらわないと。

「総理!大丈夫ですか!警護課の春川です!目を覚ましてください!」

「プルリンポ?」

だめだわ。

我を失っている。

どうすればいいの？

「プルリンポ？プルリンポ？」

「総理！」

「プルプル！プルプルプル！」

「そ、総理……………」

どうじよ？どうじよ？どうじよ？どうじよ？どうじよ？どうじよ？どうじよ？どうじよ？  
よ？

「しっかりとしてください！驚頭総理！」

「プルプル、オッパイ。プルプル、オッパイ。」

モミモミモミ

「きゃあっ！」

信じられない！

急に胸を触られた！

このセクハラおやじ！

……………

落ち着いて。

深呼吸して十秒数えるのよ。

……………大丈夫。

なるようになるわ。

だってもう、これ以上壊れないのだから。

「ちよつと・・・お姉さん・・・どうするつもりですか？」

「うるさい。黙ってて。」

「だ、だって。それメリケンサックじゃないですか・・・まさか・・・。」

「黙れ、ガキ。お前がこの人をぶつ壊したのでしょ。残念ながら、総理を担ぎながら安全を確保するのは無理だから。無茶でも正気に戻ってもらわないと。」

私は凶器と化した拳を総理に振り下ろした。

ガシュ！ドシュ！グキョ！メキ！ドピュ！

「アポオオオオオ！」

「ちよつ！待つてください！鼻から血の噴水が！」

「これくらい大丈夫よ。」

「プギ！プギイイイ！」

「うわ！歯が飛んできた！」

「あとで埋めなおすから拾っておいて。」

メキ！ブチ！グリユ！ガリ！ゴリ！

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「お姉さん・・・総理が動かなくなりましたよ・・・。」

「大丈夫よ。息はしてるから。」

ビク！ビクビク！ビクビクビクビク！

「うわ！気味悪い痙攣けいれんし始めましたよ！」

「生きてる証拠よ。」

これくらい、ショック療法の序の口よ。  
これで再起しないのなら、次は何がいいかしら。  
あれ？不思議ね。  
わたし、楽しくなってきたみたい。  
ウフフ。

「あ！良かった！お姉さん！総理が立ち上がりましたよ！」  
「あら、残念。」

でも、これで処置は済んだわ。

後は総理を逃がさないと。

やれば出来るものね、わたしだって。

ほら、総理が近づいてきているわ。

きつと感謝の言葉を贈られるのね。

きや！

抱きつかれちゃった！

感謝の意志表示かもしれないけれどセクハラですよ、総理。

……え？

何故、背後に回るのですか？

ちよつと、痛いですよ、総理。

強く抱きすぎです。

それに、気のせいかしら？

さつきから足が地面に着かない。

わたし、持ち上げられてるの？

まるで、ジャーマンスープレックスみたいだわ。

でも、きつと気のせいね。

だって私は、総理を救った英雄ですもの。

「おい、クソアマ。」

「わ、私のことですか？総理？」



「この野郎・・・なにしてくれやがったあああああ!!」

グルン!

ドツスウウウウウウウ!

うぶ!

す、素晴らしい・・・ジャーマン・・・です・・・総理。

相手に受け身を・・・とらせない、完璧な・・・スープレック  
スです。

わたしが・・・ブン投げられる意味が・・・わからないけど、  
これならもう・・・大丈夫・・・ですね。

でも・・・春川はもう限界・・・です・・・あとは自力で・・・  
お逃げ・・・ください・・・。

つづく

## 第六章 ナチュラル・ハザード？

総理が復活した。

しかも凶暴になって。

あのスープレックスには、人を殺めることへの躊躇ちゅうしゆというもの  
がなかった。

現に、お姉さんは泡を吹きながら白目をむいている。

総理、そんな怖い顔で僕を睨にらまないでください。

眼球が充血と出血で真っ赤に染まり、歯が何本か欠けているた  
め、ホラー映画の王道のような顔つきになっていますよ……。

「で？ テメエはどうやって殺されたい？」

「はい？」

耳を疑った。

それが一国の首相が吐く言葉ですか。

いや、マジでまいったな……。

僕は驚頭総理を一発殴りたいだけなのに、事態はどんどん悪化  
していく。

昨日までは退屈でも穏やかな日々を過ごしていたのに、どこを  
どう間違ったのか、実弾の飛び交うヘルゲートへ迷い込んでしまっ  
た。

怖そうなお兄さんには、撲殺されそうになるし。

優しそうなお姉さんにさえ、銃殺されそうになるし。

しかし驚くべきは、それら数々の死地を乗り越えた僕の身体能  
力だ。

いつの間に、こんな超絶フィジカルアビリティを身につけた  
のだろう。

……さてよ？

こちらら、世界で一番取扱の危険な人間凶器と一つ屋根の下で暮らしているのだ。

あやね姉さんとの恐怖に満ちた共同生活は、僕の危機回避能力を極限まで高めたのかもしれない。

「まずは、殴られてみるか？」

「い、いえ。結構です。丁重にお断りします。」

「遠慮するなよ。官邸の医者は優秀だからよ。」

「は？」

「多分、首から上が残ってりゃ、後はどうにでもなるだろ？」

どうにでもなるか！

100%死ぬわ！

で、でも……もしかしたら、このピンチも切り抜けられるかも知れないぞ。

僕は自分が思っている以上に強いかもしれないのだから。

「じゃあ、ぼちぼち始めるか。」

総理がプロボクサーのように構えて、ステップをとり始める。

「いくぜ？」

シュン！

バギイイイ！

「あ……ば……」

何をされたのだろうか。

速過ぎて見えなかった。

ああ、目眩めまいがする。

それに鼻がとても熱い。

時間が経つにつれて、鈍痛が顔面を襲う。

鈍痛はやがて激痛へと変わる。

「う、ううううう。」

「どうした？軽いジャブだぞ？」

この総理は何者なんだ。

ハローワークでは、小柄で優しそうなお爺さんにしか見えなかった。

だが、よく観察すれば只者ではないことが分かる。

胸や腕、首の太さが尋常ではない。

まるで、小さな巨人。

「まあ、もうちよっと付き合えや」

シュン！シュン！ドグン！

「あべ！うぶ！ぐほ！」

僕は耐え切れずに倒れた。

多分ジャブを二発の後、強烈なボディーブローを食らった。

「うぼめ」

今日の昼飯が口から溢れる。

「おいおい、どうした？これくらいで寝るなよ。」

戦慄の笑みを湛<sup>たた</sup>えながら、横たわる僕の右足を掴む。  
間接を極められ、総理は足を抱えたまま体ごと回転して、それを捻<sup>ね</sup>じ切ろうとする。

ドラゴンスクリューだ。

「おらあー！」

ビキビキ！ゴキ！ゴキゴキ！

「あびやあああああ！！！」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い  
筋肉と靭帯が裂け、関節が粉碎される。

「右足もいつとくか？」

ぐるん！

ギチギチ！ゴキリ！

「むきやあああああ！！！」

もう無理！もう無理！もう無理！もう無理！もう無理！もう無理！  
もう無理！

激痛のあまり、発狂しそうだ。

両足を破壊された僕は、地べたを転げ回った。

「次は腕をいじってみるか。」

もう、謝るんだ！

許しを請うんだ！

「あ・・・が・・・そ、う、り、・・・」  
「ああん？」

許してください。

・・・  
・・・

あれ？

なぜ言葉にできない。

なぜ涙がこんなにも溢れてくる。

「お、おい。そんなに泣くなよ。俺が悪者みたいじゃねえか。」

「ヒック・・・うう・・・うううう。」

「だって、オメエから仕掛けてきたんだろう！」

「ううううう！・・・！ヴウウウウウウウ！」

「う・・・その・・・悪かったよ。俺もガキ相手に大人げなかった。」

違う！

慈悲を請うているんじゃない！

悔しいんだ！

僕は悔しいんだ！

無力に。

圧倒的無力に。

もう、わかってるんだ。

あんたを殴ったぐらいじゃ何も変わらないことも。

そして只の変人として扱われ、世の失笑を買うことも。

だが変人で悪いかよ！

<sup>あいらが</sup>抗って悪いかよ！

そりゃ、最初は姉さんに無理やりやらされてたよ。

でも、やっぱり僕は！

そう、僕が！

あなたに伝えたいんだ！

わかってもらいたいんだ！

怒りを！

憤り（いきどおり）を！

激昂を！

だが、どうだ？

今や、相手に同情される始末だ。

ちくしょう！

くそつたれ！

「だ、だいじょうぶか？おめえ。」

「そ．．．うり．．．。」

僕は．．．

「お、おう。」

あなたを．．．

「くたばれ．．．チン ス豚野郎．．．」

殴りたい！！

「てめえ．．．！」

くっく

## 第六章 ナチュラル・ハザード？

もう、僕を縛るものは無い。  
虚飾きよじやくは捨てた。

今では全てが鮮明に見える。

生まれ変わったと言ったら大袈裟かもしれないけれど、本当に心が自由なんだ。

「おい、小僧。」

「……」

「このまま続けても良いけどよ、おめえ死ぬぞ？」

返答代わりに、もう立ち上がることも出来ない僕は、総理の革靴に噛みついた。

「グウウ！」

「おい！クソガキ！」

顔面を蹴り飛ばされ、さらに総理は僕の腕に組みついた。

ボギイイ！

逆十字固めが見事に炸裂する。

多分、腕が折れた。

でも痛みは無い。

痛覚がすでに麻痺しているのだ。

「グウウウ！ガウウ！」



僕は再び噛みつく。  
残った片腕で地べたを這いずりながら。

「ちよ！おめえ！狂っているのかよ！」

「・・・狂ってなんか、いない！」

「じゃあ何なんだよ！俺を、そんなに殺したいのか！？」

「殺したいわけじゃない！」

「意味わからねえよ！一体どうしたいんだよ！？」

「あなたに知って欲しいんだ！！小さな人間の大きな一念を！」

「大きな一念？お前の・・・怒り、か？」

「こんな方法間違っていることは、わかっています。でも、言葉じや伝わらないことが世界と僕には多すぎるから！」

「じゃあ、おめえ、マジで殴るためだけに・・・」

「おかしいですか？」

「・・・」

総理は沈黙した。

そして、じつと僕を見つめる。

「おかしくは・・・ねえよ。だが正しくもねえよ。」

「・・・」

ダッダッダッダッ

無数の足音が近づいてくるのが聞こえる。

「総理！ご無事ですか！？」

地味なスーツに身を包んだ屈強な男達が一斉に総理に群がった。  
警備の人たちが追いついたらしい。

「テロリスト確保！」

僕は四人の警備員に組み伏せられ、手錠をかけられた。

もう歩くことも出来ない僕に、大袈裟じゃないか。

そんな哀れな敗北者に、総理はゆっくり歩み寄ってくる。

「おう、おめえ名前は？」

「……土筆利宗です。」

「！！！！」

総理の顔色が急激に青ざめる。

明らかに狼狽している。

「……そうか。なら、納得もできるか。」

「？」

「俺はてめえのことが気に入らねえ。今も他の奴らの目がなけりや、残りの左腕ももぎ取りたいぐらいだ。」

「どうぞ。それでも僕は止まりませんけど。」

「わかっているさ。だから、てめえの根性だけは認めてやる。」

「どうも。」

「ふん。かわいげのねえヤツだな。俺が他人を評価するなんてのは滅多にないんだがな。」

そう言つと総理は、伝統工芸の巨匠があしらつた般若の面よりも恐ろしい笑みを浮かべ、ゴツンと僕の頭を殴つた。

「まだ懲りねえなら、次は堂々と官邸にきやがれ。拳で訴えるのは筋が通ることじゃねえと思うがよ、俺ぐらい器のでかい男はテメエみたいな馬鹿の相手もしてやるよ。」

「……次は、こうはならないかもしれないですよ？」  
「当たり前だ。今度は、生まれたことを後悔するような地獄を見せ  
てやる。」

総理はカツコつけて立ち去ろうとするが、そこを警備の男達に  
止められる。

「総理、御疲れのところ恐縮ですが、直ちに私達と地下シェルター  
に避難していただきます。」

「は？ふざけたこと言うんじゃないやねえ。腹減った。ステーキ食いに行  
くぞ。」

「緊急事態なのです。」

「だから、クソガキはこうして捕まえただろう。」

「いえ。ケース・ナチュラル・ハザードが発生しました。」

「！……マジかよ……。」

つづく

## 第六章 ナチュラルハザード？

どうしたのだろうか？

総理達の緊迫感は今にもキューバ危機が再来しそうなほどだ。

「総理！」

「おう。加藤か。」

驚頭総理のもとに、メガネをかけた神経質そうな男性が駆け寄る。

たしか、秘書官の人だ。

「今から2時間ほど前に、ナチュラル・ハザードが東京湾から上陸しました。」

「海自は何をやっていた？」

「無論、海上レーダーに捉えた時点で哨戒機にて追尾を始めました。」

「護衛艦は？」

「汎用護衛艦ありあけ、すずなみ、さざなみ、の三隻にて迎撃を展開しております。」

「対ナチュラル・ハザード用に強化改修をしたばかりの三隻じゃねえか。」

「はい。最新の対潜能力を持っているのですが……。」

「まさか……ダメだったのか？」

「……二隻が大破。航行不能にあります。」

「馬鹿な！どれだけの国防費をつぎ込んだと思っただやがる！」

おいおい。

そんな世紀末な会話は他でしてくれないかな。

冗談でしょう？  
怪獣映画じゃあるまいし。

「現在、国民保護警報を発令。おそらく市街地戦に突入すると思われ  
れます。」

「奴の目的は？何か声明は？」

「それが・・・真つ直ぐここに向かっていているとのことですよ。」

「・・・俺が、標的か・・・。」

総理が崩れ落ちた。

拳で地面を叩きつける。

アスファルトが血で湿っていく。

その時だ。

ドオオンバンバンバン！

ドオオン！ドオオン！

「うわ！」

びっくりした。

遠くから轟音が響きわたる。

これって・・・砲撃音だよな。

「始まったようですね。」

「ああ。加藤、そのガキを車に乗せる！現場に向かうぞ！」

「避難は！？それに、この青年をどうするおつもりですか！？」

「馬鹿野郎！俺が逃げれば、下手したら東京が壊滅する！それに、  
そのガキが俺達の切り札になるかもしれん！」

「は、はい！」

東京お台場。

普段なら、人で溢れかえるレジャースポットだ。

勿論、今日も相変わらず人で賑わっている。

いつもと違うのは、その人たちが全員迷彩服を着ているくらいだろう。

「対戦車ヘリ部隊からの連絡はまだか！」

「はい！現場も相当混乱しているようです。」

「これだけ迅速に部隊を展開したというのに！全てはシュミレーション通りに進めたというのに！何故撃破出来ぬ！どれだけ、この日のために訓練を積んできたと思っっているのだ！」

多分、指揮官の人だろう。

敵つい顔のその男は、目の前のモニターを怒り任せに前蹴りで粉碎してしまった。

「落ち着けや、万江城。」

「総理！？あんたが何故ここにいるんだよ！」

「相変わらず口の悪い奴だな。」

「おい！誰かこいつを車にブチ込め！」

万江城と呼ばれた指揮官の両脇にいた自衛官が、総理を避難させようと近づく。

よした方がいいと思うよ。

例え絶世の美女の顔でも、今のこの人は躊躇いなくグーで殴るから。

「邪魔だ。」

案の定、自衛官達は総理の鉄拳の前にあえなく失神してしま  
た。

わかるよ。

すごく痛いよね、それ。

「おう、万江城、まだわからねえのか。上陸された時点でお前達は  
すでに詰んでいたんだよ。」

「馬鹿なことをいうな！素人が！最新主力戦車の10式は、奴を誅  
すために開発したのだぞ。高機動にて奴を翻弄し、必ず仕留めて見  
せる！」

「オメエにも分かっているはずだぜ？海上ならまだしも、地上にお  
いて奴は無敵だ。」

「かつては、な。だが、今日という日のためにアンチ・ナチュラル・  
ハザードの兵器を配備してきたのだ。六年前とは違う！」

「オメエが税金の塊をどぶに捨てるのは勝手だが、責められるのは  
俺なんだぜ？」

「それがあんたの仕事だろ。」

「気軽に言ってくれるじゃねえか。とにかく、俺は肉眼で状況を確認  
したい。装甲車を借りるぜ？」

「糞！どこの馬鹿がこいつを総理に選んだんだよ！おい通信士！今  
すぐ特殊護衛部隊を編制させろ！対戦車装備も忘れるなよ！俺も同  
行する！」

司令部がさらに慌ただしくなる。

本当に戦争をしているのだ。

だが、一体何と？

ギョオオオオオ！

大気を突き破りながら、戦闘機が上空を飛びさる。

数キロ先で爆撃が始まったようだ。

大地の揺れは激しく、空気が振動して平衡感覚が狂いそうだ。

「おい！土筆利宗！」

装甲車に乗り込んだ総理が、爆音に負けぬよう大声で僕を呼んでいる。

僕は担架たんかに縛り付けられた状態で、自衛隊の人たちに運ばれる。輸血や点滴や良く分からないチューブを体から幾本も生やした僕は、知らない人がみれば戦闘に巻き込まれた重症の民間人と映るだろう。

病院に運んでくれるのだろうか？

でも警察が先かな。

「オメエは後部座席に乗れ！」

「は？」

自分の耳は壊れたのだろうか。

独力で歩けもしない僕を連れていくだつて？

「丁寧に、かつ断固とお断りします！」

「ああ？わりい、周りがうるさくて聞こえねえや。おい、自衛隊のにいちゃん！そいつを担架ごと乗せてくれ！」

「は！」

「待って！ちょっと待って！やめてください！」

あんたマジかよ！

きつと、総理の血は緑色で冷たいのだ。

前世はスターリンかポルポトだな、きつと。

信長だつてビックリして髑髏の酒杯をうっかり落とすよ。



この人でなし！

やがて、装甲車は隊列をなして灼熱の地獄道を横断するのだった。

つづく

## 第六章 ナチュラルハザード？

この世には摩訶不思議なことが無数にある。

UFO、UMA、ポルターガイスト。

数えだしたらきりが無い。

勿論、ナンセンスだってことは分かっている。

けど僕は、否定から入ることはしない。

だって自分の目で確認した事しか信じられないのであるなら、

僕達の常識は全てが虚構になってしまうから。

いま頭上を船が飛んで行った。

人が聞けば、誰もが笑うだろう。

それでも、現にそれは飛翔していたのだ。

「よけるおおお！」

装甲車のドライバーが必死にハンドルを切る。

ズゴオオオオ！

船体が地面にめり込み、猛烈な破壊音と共に後方へ去っていく。

「なんだよ！？あれは！」

総理が窓から顔を出しながら叫ぶ。

「海上保安庁の巡視艇と思われませう！」

「糞！流れ弾でこのスケールかよ！」

だが、これは始まりに過ぎなかった。

数秒後には先頭を走っていたジープが吹き飛ばされてきた戦車に押しつぶされ、後方のトラック2両は落下してきた三階建てのアパレルショップの下敷きになった。

「ぎゃあああ！もう引き返しましょうよ！ね！ね！」

僕は必死に総理に訴える。

だって、これで生き残るのは昭和のファミコンゲームよりハードだ。

だが、あの頃のDMなプレイヤーが如く、総理は満面の笑みでむしろ楽しんでいるようだ。

「ほれ、もう着くぞ、土筆つぐしのガキ。」

飛び交う砲弾と怒声で埋め尽くされた、鋼鉄と肉と血のアンサーブル。

そこには慈愛とは最もかけ離れた空間があった。

「全員降りろ！総理を守れ！」

総理の下車と同時に完全装備の兵達つわものが護衛につく。

僕もミイラ状態のまま、担架で運ばれる。

もう、いいや。

ここまで来たら最後まで付き合おうじゃないの。

あやね姉さん、僕は大人のエゴに殺されそうです。

「おう！やってやがるな。大いに結構。戦況は？」

「おい！指揮所に情報が届かんぞ！どうなっている！？」

総理と万江城さんは、すぐさま前線指揮官と思しき人物に詰め

寄る。

「そ、総理に万江城まえしろ一佐！？ここまでいらっしやったのですか!？」

その人は泥まみれで憔悴しきっているようだ。

顔には恐怖という名のマスクが張り付いている。

「戦況は・・・我が方が徐々に押されてきております・・・。実際にご覧になった方が早いかと。」

海に面するお台場海浜公園は、今や近代兵器大展示会場となっていた。

十数両の戦車が巨体を揺らしながら大砲を撃ち放つ。

その他にも、見たこともない兵器達が浜辺に向かって砲火を浴びせている。

このままでは東京湾が蒸発しそうな勢いだ。

「爆煙でなにも見えんぞ？」

「砲撃止めええ！」

指揮官が無線に向かって怒鳴り散らす。

やがて周囲を覆っていた煙が浜風に流されていく。

そこには・・・

「馬鹿な・・・。」

「言っただろう、万江城。六年前、奴はSSM-1（対艦ミサイル）の直撃にもビクともしなかつた真正正銘の怪物だぞ？火薬の量でどうにかなる相手じゃねえんだよ。」

海辺には、巨大な塔がそびえていた。

漆黒の、天を衝かんとするかのよ様な巨大な塔が。

「おい、ありゃあ……あれだよなあ。」

「ええ、総理。海自の潜水艦です。」

おいおい。

どうやら、あれは地面に垂直に突き刺さった潜水艦らしい。

その下には、破壊された船やへり、戦車で築き上げられた丘が鎮座していた。

油や鉄の焦げる匂いが鼻を突く。

「……万江城一佐。我々は本当に一人の人間と戦闘をしているのでしょうか？これでは、まるで神に挑む無知な愚衆ではありませんか。」

待て。

ちよつと待て。

指揮官さん、先程、かなりぶっ飛んだキーワードをおっしゃりませんでしたか。

一人の人間と戦っている？

「奴は神などではない。間違いなく、私達と同じDNAを持った、只の人間だ。」

「しかし！」

「見る。こちらの損害も甚大だが、奴とて無傷ではないのだ。」

人の命を奪うことを目的として生まれた兵器達の残骸の頂いたadakiに、その人間は立っていた。

筋骨隆々。

気炎万丈。

ここからでも、その身体的異常度がはっきり確認できる。

ダイビングスーツに包まれた三メートルもあるうかという巨軀は、はち切れんばかりの筋肉に覆われ、無数に穿かれた銃創が無意味であったことを主張している。

毛髪の無いスキンヘッドの頭部では、切創、裂傷、割創と、古傷達が行列しており、その人物が長年戦場を住処としていたことを物語っている。

まさに鬼神。

まさに修羅。

浅草雷門の雷神の代わりに、この人が立っていたって誰も気づかないだろう。

「無傷ではないですが……もつと怖くなったような……。」

「邪推するな。アレとて、撃たれれば痛いし、血も出るのだ。このまま砲撃を続ければ、いずれ倒れる。」

それは無理だよ、万江城さん。

僕にはわかる。

いや、僕だからわかる。

「彼女」は宇宙空間に放り出されてもピンピンしていたのだから。

「どうだ？土筆のガキ。久々の対面だろう？」

「総理……。」

「これこそナチュラルハザードの正体よあ！世界中の『政治家』を名乗る者の宿敵にして、人でありながら、人であることを拒絶された人間！」

「あの人は……。」

「おう！テメエの母親、『土筆ゆきな』だ！」



## 第七章 お台場の戦塵

土筆つぐしのガキの行動に迷いは無かった。

担架を運ぶ自衛官から、唯一自由がきく右腕で拳銃を奪うと、その照準を俺に向けやがった。

「総理。今すぐ、こんな一方的な戦闘を終わりにしてください。」

「ああん？」

「母はただ帰国しただけですよ？撃たれる謂われは無いし、この攻撃も彼女には無意味です。無駄な血が流れるだけだ。」

こいつは、俺を襲った時でさえ武器は使用しなかった。

そのガキが、俺に銃を向けるのか。

おそらく虚勢じゃねえ。

そういう奴は、本当に撃つと決めた時しか凶器を手にしない。

「おめえは、自分の母ちゃんのことをあまり知らないようだな。」

「知ってますよ！あんな物騒な顔つきと体格をしてはいますが、純粹で優しい心の持ち主です！」

「そうじゃねえよ。あいつの置かれている状況についてだ。」

「状況・・・？」

このガキの言うとおりだ。

土筆ゆきなは、本当は虫も殺せないような可憐な少女だった。信じられないだろう？

あんな化け物も、かつては楊貴妃でさえ嫉妬するような容貌の持ち主だったのだ。

三十年前、当時名家として有名だった土筆家の長女ゆきを、俺はあるパーティーで紹介された。



病弱な彼女の肌は透き通るように白く、とても脆もろそうな美しいガラス細工のような女だった。

俺は土筆家という強力な経済的後盾が欲しかった。

だから、その手始めとして、俺は土筆ゆきなに接近を図った。

だが、馬鹿なことに。

本当に馬鹿なことに。

俺は、土筆ゆきなに恋をした。

いい歳をしたオッサンが、年端もいかぬ少女にだ。

自慢じゃねえが、女は飽きるほど抱いてきた。

けど俺は性的欲求以上のことを女には求めたことが無かった。

人間を愛せなかった。

仕事柄だろうな。

人の黒い面ばかり見ちまうから。

けどよ、土筆ゆきは違った。

俺の、俗世間で真っ黒に染まった心は、彼女の純白に魅了されたのだ。

あいつは、良くも悪くも真っ直ぐな女だった。

普段は大人しいのに、間違っただことにはちよつと困ったように

綺麗な眉を八の字にしても、頑かたくなに拒否した。

そして、ゆきなは『絶対に嘘をつかない』女だった。

嘘を嘘で塗り固めたような政治の世界で生きる俺は、そんな彼

女に安息の場所を求めたのだろう。

だが、ゆきなには想い人がいた。

その男は『国境無き医師団』に所属する、あらゆる戦場を駆け

回る医師だった。

確か名を薦つたけい蛸いといった。

当然のように、成人したゆきは男を追って日本を離れた。

そこで目にしたのは、有無を言わせない一方的な暴力が跋扈はつこす

る血みどろの世界。

薦つたけい蛸いという奴は名医だったらしい。

嘘かまことか、銃弾で八チの巢にされた患者の命を取り留めたこともあるという。

しかし、そんな奴をしても、戦場で流れる血の量の前では圧倒的に無力だった。

男は悔しさで身を躰し、彼女は戦場の理不尽に身を削られた。

そして、最後にゆきなから届いた手紙には、こう記されていた。

「誰も彼もが、銃を置こうとしないのです。だから、わたしが、狂気と悲しみの連鎖を断ち切ります。わたしが・・・戦争を・・・殺します。」

それは生まれいずる異形の産声だった。

「お前の母ちゃんはな、世界中から人間であることを拒絶されたんだよ。」

「意味がわかりません。」

カチ

このガキ、拳銃のセーフティーを解除しやがった。

「幸か不幸か、姉はこうというのが専門です。僕も銃の扱いぐらいならわかります。」

「・・・・・・・・。」

「世間知らずという自覚はありませんが、母が問答無用に殺されていい理由を僕は知りません。」

本当にそっくりだよ、母ちゃんに。

お前の、こういう時の目はよ。

「あいつはな、『ナチュラルハザード』、つまり『天災』として認定されているんだよ。」

「天災？」

「国連総会で秘密裏に決議されたことだ。一般人はしらねえやな。つまりよ、あいつは人間ではなく、台風や地震の類として分類されるわけだ。」

「そんな……。台風を防ぐためには、それにミサイルを撃ち込もうと、国際法的には正当化されるとい訳ですか……。」

「そういうこった。あいつには……。人権がないんだよ。」  
「横暴だ。」

「……。ああ。そうだな。だが、あいつはそれだけのことをしちまった。世界を敵に回すほどのことをな。」

「母さんは、平和を求めているだけです。方法が他人とは違うだけです。」

「知ってるさ。ゆきななは戦場という名の怪物を殺そうとした。だがな、あいつの暴走した力は、結局、敵対する両軍を完膚なきまでに滅ぼしちまうんだよ。」

「……！」

「おいおい、まさか奴が平和論を唱えるだけで気が済むようなタマとも思ってたか？最近じゃ北アフリカで、軍事政権と、それに敵対する反政府軍を壊滅させやがった。ゆきななにとっては喧嘩両成敗のつもりだろうが、被害を受けた方にとっちゃ冗談じゃすまねえ。」

「無茶苦茶な話ですが……。母さんなら、可能か……。」

「そんな存在は、許されねえのさ。とくに大国にとってはな。世界の軍事バランスが崩れるだけじゃすまねえからな。」

「だから、よってたかって、母を殺そうとするのですか。」

「日本は世界のATMなんて擲掄されるがよ、その真実は、賠償だ

ぜ？国連に渡す金も。先進国や後進国に渡す金も。」

「母が日本人だから・・・ですか？」

「おう。うちの化け物をご迷惑おかけしましたっつてな。けどよ、知つての通り、日本の経済には、もうそんな余裕はねえんだよ。奴一人のために、この国が崩壊しちや洒落にならんだろがよ。」

土筆のガキはゆっくりと拳銃をおろした。

自衛官が、ガキを取り押さえようとするが、俺は手でそれを制す。

・・・さて。

そろそろ、やるか。

「加藤。」

「はい。ここに。」

「あれの準備は？」

「万端にございます。」

痛いじゃすまねえだろうがよ。

しょうがなえな。

俺は日本の内閣総理大臣だ。

この国を守らなくちゃな。

## 第七章 お台場の戦塵 ?

「おいおい、総理。輸送トラックに積んであるこいつは何だ？」

「俺が加藤に用意させた戦車の主砲だが？」

寝ぼけたこと言ってるんじゃないやねえ、万江城。

てめえ、自衛官だろ？

「阿呆。見ればわかる。これはラインメタル社の44口径120mm 滑腔砲だ。」

だが私が言いたいことはな、何故むき出しの戦車の主砲に、トリガーやらストックやらスコープが装備されているかということだ。まるで人が扱うかのようなではないか。」

「左様でございます。」

「あなた、総理の秘書官の・・・」

「加藤と申します。驚頭総理の要望により、基地の戦車から拝借いたしました。書類等は後ほど。」

「おい・・・まさか・・・この主砲は・・・。」

「おうよ。俺様が使つものよ。」

トラックから降ろして、肩に乗せて構えてみる。

体中の筋肉が膨張して、スーツが張り裂けそうだ。

だが、悪かねえ。

要は糞長くて重いバズーカみたいなもんだろ。

「チツ。そう言えば、ここにも怪物がいたか。」

「俺のことか？」

「この主砲は、砲身5メートル、重量は4トンもあるのだぞ。それを、ムキムキの爺さんが干し竿でも運ぶかのように扱っているのだ。」

私でなければ、腰を抜かしているところだ。」

「そりゃあ、大袈裟じゃねえか？」

「フン。見てみる。」

そこには、ここを案内した若い前線指揮官が地面に崩れていた。蒼白な顔面からは、眼球が飛び出しそうだった。

「……総理、あなたは本当に、あの鷲頭総理なのですか？」

「おい、万江城、この若い奴は？」

「六年前の、九州戦争を知らない者だ。」

そういう万江城も、パンツァーファウスト3（対戦車ロケット砲）を背中に何本も背負い始めた。

おい、武蔵坊弁慶みたいで、俺よりかつこよくねえか？

「あ、あのう……。」

「ああん？」

腰を抜かした前線指揮官が、化け物でも見るかのような視線をおれに向けやがる。

「もしかして、皆様方は、アレに挑むおつもりですか？」

「対戦車ロケット砲を持って海水浴に来たつもりはねえが。」

「し、しかし、生身でアレに立ち向かうのは自殺行為です！」

「いいや。むしろ、その逆なんだな、これが。」

「逆……ですか？」

「六年前の戦闘でも、生身の戦闘員の死者はゼロなんだよ。」

「まさか……そんな……。」

「信じられないだろうが、あいつは世界で一番優しい悪魔なんだよ。機械兵器に対しては凄まじい力で圧倒するが、人の顔を見ると途端

に実力を発揮できなくなる。戦闘兵器で奴を消耗はさせられるが、とどめを刺せるのは人間だけだ。」

チツ。

絶対こいつ信じてねえや。

まあ、しょうがねえか。

六年前も、偶然だった。

あらゆる最新兵器が無力だった中、あいつに傷を負わせたのは歩兵のたった一発の銃弾だったのだから。

「そろそろ行くか、万江城よお。」

「うむ。わたしのチームは準備万端だ。」

万江城の後ろには、黒の特殊防衛スーツに身を固めた六人の精鋭たちが、まるで血に飢えた猟犬のように従っている。

「あ、あのう……。」

「おい、耳元で囁くなよ。気持ち悪い。」

「どうして僕は、総理の背中に縛り付けられているのですか。」

土筆のガキは、当惑しているようだ。

けど、当たり前だろう？

さすがの俺も、怪物相手に無策じゃあ不味い。

「お前は盾。」

「は？」

「ゆきなな性格からして、絶対にお前には危害を加えないからな。ヤバくなったら俺の人間シールドになれ。」

「あんた……本当に最悪だ。」

俺は、絶叫マシーンが大嫌いだ。

だから作戦部が立案した、このプランには最後まで反対した。歩兵による白兵戦がナチュラルハザードに有効なのは実証されたが、問題はとうやって人員を運ぶかにあった。

へり、装甲車、あらゆる輸送手段を試したが、シュミレーションの結果、全てが奴に近づく前に破壊されることが分かった。

結果、採用されたのが人間ロケット。  
無茶苦茶だぜ。

ドオウウウウウウン！

次々と、隊員を乗せた一人乗りロケットが射出用特殊トラックのカタパルトから発射される。

ロケットは、ゆきなに衝突する直前に空中分解して、なかのロケットがあらわになる。

そして、コクピットは瞬時に巨大なクッションに包まれ、奴に体当たりをして着地するのだ。

遠くから眺めると、カラフルな風船が奴に特攻しているようにしか見えない。

こんなメルヘンチックな攻撃は古今東西皆無だろう。

「本当に俺もやるのか？万江城。」

「誰も、あんたに前線に出るなんて言っていないだろう。」

「いや、あいつは俺じゃなくちゃ倒せねえよ。」

「まあ、そこら辺は私も否定できないのが辛い立場だが……。もしかして、乗るのが怖いのか？」

「ば、馬鹿いえ！い、行くぞ！早く発射しろ！」



ガチガチと音を立て、カタパルトが傾く。  
ロケットのエンジンが雄叫びを上げて、ノズルから大量の煙が吐き出される。

糞！

俺、観覧車さえ駄目なんだぞ。

もっと、メリーゴーランド的な優しさは無いのかよ。

ギョギョゴゴゴゴゴゴゴゴ！

やべえ。

やっぱり降りよう。

歩いて行こう。

「じゃあな、総理。短いが、良い旅を。」

コクピットのモニターに万江城の満面の笑みが映し出される。

「てめえ、楽しそうじゃねえか……。」

「フ、やはり隠せんかな。」

「お、降ろしやがれ。俺は歩いて行く。」

「実は、この人間ロケット作戦には裏があつてな。」

「ま、まさか……。未完成品じゃないだろうな……。」

「安心しろ。装置は完璧だ。だが、あんた自衛隊に無茶な命令ばかりして、相当嫌われているらしいな。」

「……どういう意味だ。」

「この人間ロケット作戦が採用された一番の理由は、『総理が怖がる顔が見たいから』だそうだ。」

「！」

「ちなみに、あんたの今の顔、全国に放送されているらしいぜ。よ

「つぼど恨まれているんだな。まあ、せいぜい頑張れよ。私も次で追いつく。」

くそ！

くそ！

マジかよ！

「じゃな。おい、オペレーター。発射しろ。」

グギヤアアアガガガ！！

おい！

この音ヤバくないか？

本当にちゃんと飛ぶのか？

う、

ちよ、

ぐ、

ぎぢあああああああああああああああああああ！！！！

## 第七章 お台場の戦塵 ?

強烈な衝撃と共に、コクピット内が爆発的に膨張したエアバッグに埋め尽くされる。

おいおい、かなり痛いぞ。

これで、よく安全なんて言えたもんだ。

俺なら訴えるぞ。

とにかく、ハッチを開けて外に出るか。

「.....」

周囲の浜辺には兵器の残骸が溢れている。

ちよつとよお、冗談じゃねえぞ。

ゆきな目の前じゃねえかよ。

「あら、真さん。お久しぶりですわ。」

凶悪な顔つきになっても、相変わらず、この女は鈴が鳴るような声でしゃべりやがる。

「おう。お前も元気そうで残念だ。」

「口が悪いのも変わっていないようですのね。」

「誰かさんおかげで、気の休まることのない生活を強要されているからな。」

「真さんまで、私を邪魔者扱いするの？久しぶりの帰国なのに・・・みんなして私をいじめるなんて。」

「お前のことだ。ただの帰国じゃないんだろ？」

これは重要なことだ。

ゆきな目的は何だ。

ことによっちゃ、日本だけの問題に収まらない。

「つまらないと思うの。」

「は？」

「今のこの国が。」

「お前……。」

「だって、外国で見たテレビに映る日本人、みんな暗い顔ばかりなのですよ。」

「……で、どうするつもりだ。」

「世直しですわ。」

予想されうる限りの最悪な事態だ。

人間火薬庫が世直しだと？

「きゃあー！」

敵つい顔の3メートルの巨人が、少女のような悲鳴を上げる。

どうやら、万江城の搭乗した巨大風船がゆきなに激突したようだ。

風船の扉が開くと同時に、万江城は対戦車ロケット砲の成形炸薬弾をゆきなに向かって放つ。

ドオオオオン！

完全に虚を突いた奇襲に、さすがの怪物も吹き飛ばされる。

「わるいな。甘美な再会を台無しにしたか？」

頭を押さえながら、万江城は黒豹のような機敏さでコクピット

から降りてきた。

「いや、お前にしちゃ空気を読めたグッドな攻撃だ。」

「？」

「あいつがな。」

「ああ。」

「日本を世直したとよ。」

「！・・・この国が崩壊するぞ。」

「私はそんな酷いことはいたしません。」

「！」

「！」

吹き飛んだはずのゆきなは、俺達を見下ろすように、すでに背後に立っていた。

「ちいっ！！」

不味い。

ゆきなは既に反撃態勢にはいつていた。

ボーリングの球ほどもあるうかという拳が振り下ろされる。

バフウウウウウウン！！

だが奴の拳は、俺達には向けられなかった。

どういう訳か、地面を殴りつけたのだ。

その瞬間。

ゆきなを中心として大気が歪み、大地は揺れ、突風が吹き荒れる。

だめだ。

まともに立っていることもできない。  
それどころか。

「総理！避ける！」

周りに散乱していた鉄クズは凶器と化していた。  
局地的な嵐により、鉄の塊が無差別に飛び交う。

その中の船の外壁らしき巨大な鉄板の一つが俺と万江城に襲いかかる。

「なめんじゃねえええええええ！！！」

俺は全力で、それを受け止める。

糞野郎。

相変わらずの化け物ぶりだぜ。

だがよ、これくらいで俺がひるむかよ。

台風の中心は無風だ。

おれは大きく跳躍して、その中心に飛び込む。

「くたばれ！ポケエエエエエエ！！」

鉄板を渾身の力を込めてゆきな頭部に叩きつける。  
どうだ。

これは痛いだろうか？

ビュッ！

奴の毛髪のない頭頂部から、血が吹き出る。  
やはり、間違いない。

ダメージを与えるには、至近距離からの奇襲しかない。  
遠距離からの攻撃では、奴の超人的知覚に悟られ、防御されてしまつからな。

しかも、対人戦に戸惑っている今がチャンスだ。

「・・・いつた〜い。」

は？

それだけかよ。

もつと痛がれよ。

「いたずらが過ぎますわ、真さん。お仕置きが必要ね。」

そう言つと、ゆきなは浜辺の砂を一握り掴んだ。

「えい。」

奴にとつては、ただの砂かけつこのつもりなのだろう。  
しかし光速のスピードで放たれる砂は、自動車に撥ねられたか  
のような衝撃をもたらした。

「ぐぶつう!」

やべえ。

アバラ骨が何本かいったな、こりゃ。

「鷲頭総理！伏せてください！」

うお！

ドビュン！

「きゃあー！」

どうした。

なにが起きた。

ゆきなな頬が大きく腫れている。

「直ちに補給コンテナに向かってください！」

万江城の率いる、先に到着していた黒ずくめの特殊部隊の攻撃らしい。

その両腕には、アンチ・マテリアル・ライフルを抱えている。

普通これで狙撃されれば、体がバラバラになる代物だ。

だが、ゆきななは頭部を近距離から攻撃されたにも関わらず、ピントでもされたかのような様子だ。

「コンテナが届いたか。」

上空からパラシュートで送られたコンテナには、俺の武器も土筆のガキも乗っているはずだ。

俺達が化け物の注意を惹きつけているうちに投下したらしい。

「ここは、我々が時間を作ります！」

「おう。まかせた。だが、必要以上にあいつを怒らすなよ？奴はまだ、お前たちを殺さない程度の力のコントロールに戸惑っているだけだ。」

「はー！」

さあ、始めるか。



日本の存亡を賭けた喧嘩を。

だが、奴を殺すのは多分不可能だろう。

ならば、拳で伝えるしかない。

俺が、無関心と無責任に緩やかに殺されつつあるこの国を、どんなに愛おしく思っているか。

馬鹿で、思いあがりで、謙虚さすら忘れた国民に、どれほど傾慕しているかを。

## 第八章 老獅子＋機敏なキリン＋人間刃物

一体何発の銃弾が母さんに撃ちこまれただろう。

万江城さんは背中にも山のように背負っていた対戦車ロケットを、もう撃ち尽くそうとしている。

総理は巨大な大砲を、相手を殴れる超至近距離から撃ち放つ。その砲口からは、極太の鉄鋼弾が射出され、母の体表に突き刺さる。

鷲頭総理におんぶされている僕は、戦車の主砲が放つ熱風をもろに受けて、顔面を火傷してしまった。

他の隊員たちは、中距離から二人への援護射撃に徹しているようだ。

戦況は、対人戦になってから徐々に総理達が押ししているように見える。

しかし。

「おい！総理！」

「なんだ！万江城！いま忙しい！」

総理は、母さんのハンマーパンチを必死の形相で避ける。

その両拳が地面に接触すると同時に、地雷が爆発したかのような衝撃と突風が辺りを支配する。

「やはりか！総理！そろそろ退き時期だ。奴は、人間との戦闘に慣れつつある。その証拠に、さっきから私達の攻撃に効果がみられない。的確に防御しているのだ。もう奴に戸惑いが無いのだ！」

「んなこたあわかってる！だがよ、俺達が逃げてたら、この国はゆきなに蹂躪される！」

その時だった。  
辺りを覆っていた砂塵の中から、突如巨大な腕が万江城さんを襲った。

「ちい！」

「万江城！」

「つくかまえた。」

その両腕が万江城さんを捕捉すると同時に、辺りに彼の骨が握り折られる音が木霊する。

「ぐ、ぐうううう！」

万江城さんは悲鳴を上げなかった。  
気絶もしなかった。

おそらく、全ての両あばら骨を粉碎され、背骨にヒビがはいるとも、最後のロケットランチャーを母に向けて放った。

ドオオオオオン！

「きゃあ！」

「万江城おー！」

空から何かが降ってくる。

万江城さんの体だ。

地面に肉のぶつかる嫌な音が響き渡る。

「いきてるか！この野郎！」

「ぐ、ぐう……。退け。鷲頭。今の奴には全てが無力だ。」

「お前ら！こいつを回収して、撤退しろ！」  
「は！」

特殊隊員たちは、迅速に万江城さんを運び、退避行動に入る。  
しかし、総理は……。

「……総理。」

「ああん？やつと口を開きやがったか、土筆のガキ。」

「あなたは逃げないのですか。」

「当たり前だろう。あいつらが司令部に撤退するまで、時間稼ぎしなきゃよ。」

だけど、おそらく母さんは、総理一人では止められない。

自衛隊が体制を立て直しても、全ての弾薬を撃ち尽くしても、  
彼女は倒せない。

「余所見よそみしちや、駄目ですわ。」

ほんの僅かな油断だった。

総理の腹部に、母さんの拳がめり込む。

「ぐ………はあ！」

それは、相手の命を奪うか奪わないかの、絶妙な攻撃だった。  
体が吹き飛ばない分、破壊エネルギーが体中に行きわたる。

「総理！大丈夫ですか！母さん、やり過ぎだ！」

思わず、叫んでしまった。

僕は、驚頭総理をどうしたいのだ？

「．．すくなくとも．．．．．」

「あら、利くん。ただいま。」

「お、おかえり。」

「元気にしていましたか？」

「は、はい。」

「帰ったら、久しぶりに家族で食事でもしましょう。」

「う、うん。」

「でも、その前に、意地悪な人たちと悪い人たちを、懲らしめないといけませんね。」

「．．．母さん。駄目だよ．．．。母さんじゃ駄目なんだ。」

「利君？」

「あなたは劇薬すぎるんです。死亡宣告された国には、奇跡を起こすかもしれないけれど、日本はまだ、その段階じゃない。」

「でも、この国も、そう長くは見えません。」

「そうだね。僕だって、こんな日本大嫌いだ。でもね、この総理大臣みたいに、本当に体を張って守ろうとしている政治家がいる国は、まだ壊しちゃいけないと思うんだ。」

「．．．．．」

「それでも、母さんが納得出来ないのなら．．．．僕があなたを止めます。」

「良く言った！利宗！」

はるか上空より、大音響が響き渡る。

この声は．．．．あの人だ！

第八章 老獅子＋機敏なキリン＋人間刃物 ？

晴れわたる空から、白銀の雨が降る。

いや、違う。

それは、無数の刃物達だ。

オイルと数多あまたの人間の血で固まった砂浜に突き刺さる、ナイフ、日本刀、直刀、西洋刀、槍、レイピア、スピア、トマホーク。

そして、最後に、この世で最も鋭利な『人間』が舞い降りた。

土筆あやね。

姉さんだ。

その、鉄をも両断する視線が、母さんに突き刺さる。

「あ、あやね姉さん。」

「利宗。良く言った。さすが、私の最愛の弟だ。」

「あやちゃん、相変わらず怖い顔ですわ。それでは、男の子にもてませんでしょう。」

「……母上、おかえりなさいませ。」

「やつぱり、彼氏いないのね。こんなに美人さんなのに。もったいないわ〜。」

その悪戯つぼく笑う母さんの眉間めがけて、あやね姉さんは神速のスピードで、地面に突き刺さっていた剣を投てきする。

「きゃあー！」

間一髪、母さんは丸太の如き腕でそれを防ぐが、右腕には深々と剣が突き刺さった。

「い、いったあああああい！！」

「ね、姉さん！」

ヤバイ。

あやね姉さんが笑ってる。

姉さんはマジでキレた時しか笑わない。

やっぱり、彼氏がいないこと気にしてたんだ……。

「痛い！痛い！痛い！」

母さんは、まるで子供のように喚わめいている。

「お、おい土筆のガキ。俺は夢でも見ているのか？あんなに動揺したゆきなほ初めて見る。」

「いえ。それほどダメージは無いでしょう。」

「すげえ痛がっているけどよ……。」  
「あれは、精神的痛覚が刺激されているのです。母さんは先端恐怖症ですから。」

「先端恐怖症……だと!？」

「母さんには、それこそ核兵器でさえ無効かと思いますが、一人だけ天敵がいます。刃物人間のあやね姉さんです。」

「あの美人の姉ちゃんか……。」

姉さんは、背中に背負っていた大振りの十文字槍を構える。

かつて土筆家が、あの本多忠勝から奪い取った、名槍とんぼ切りだ。

「母上、帰国早々申し訳ないのですが、ここから先には通せません。」

「あやちゃんも、私をいじめるの?」

「いえ、大人しくしていただければ、家にすき焼きの用意がござい

ます。」

「あら。すき焼き？素敵！」

「しかし、このまま日の本を混乱せしむというのなら、私がお相手いたします。」

「・・・あやちゃんも、利君と同じ意見なのね？」

「私も、そして自身が所属する組織も、もう少し緩やかな革命を望んでいるのです。」

「・・・そう。」

じりじりと、母さんと姉さんの間合いが縮まる。

「総理。」

「ああん？」

総理の背中におんぶされる形で縛り付けられている僕に、いま出来ることは一つだけだ。

「姉さんを援護しましょう。いくら彼女でも、一人では母さんを止められません。」

「俺もそうしたいけどよ、対人戦に慣れちまったゆきなには、俺でも迂闊に近づけねえよ。」

「大丈夫です。僕が指示します。」

「お前が？」

「昔、家族でよく鬼ごっこをしました。あの姉さんでも母さんには捕まえられましたが、僕だけは一度も捕まったことはありません。」

「なるほどな。確かに、お前の危機回避能力は異常だな。」

「育った家庭がこんなですから・・・。」

「ああ、同情するぜ。了解した。クソガキにあごで使われるのは癪だが、あいつを止められるなら上出来だ。」



姉さんが地面を蹴り跳躍し、猛禽類の如く襲いかかった。その体が一本の矢となり、母さんの肩に槍を突き立てる。そして、すぐさま地面の日本刀二本を引き抜き、巨人の両わき腹に刺し込む。

「きやつあああああー！」

「まだです。母上。」

攻撃の手は止まない。

返す手で、八本のダガーを腹部に投げつける。

さらに背後に回り、槍を次々に刺しまくる。

母さんがハリネズミになるまでに、僅か二、三秒とかからなかった。

「痛い！痛いー！！」

そして、追い打ちをかけようとした瞬間。

パン！

空気が破裂したような音が鳴り響き、姉さんが吹き飛んだ。

パン！パン！パン！

空中に浮遊するあやね姉さんに、破裂音が連続して襲い、そのたびに右に、左にと、体が弾き飛ばされる。

まるで子供が乱暴に扱う操り人形のように、僕の頭上をジグザグに跳ねまわる。

信じられないことに、母さんは空気を掴み、相手に当てているのだ。

まずい。

「総理！」

「おう！」

彼女がこちらに振り向く。

「右へ避けて！」

「糞！」

総理の間近で大気が破裂する。

「一步後退！」

目の前の風景が歪み、衝撃が襲いかかる。  
あと十センチ前にいれば、全身粉碎骨折だ。

「今です！」

「おりゃあああああああ！」

総理の筋肉がギチギチと膨張し、長大な戦車の主砲はこん棒と化す。

母さんの額にめり込む鋼の塊。

「姉さん！今です！」

「姉が死にかけているというのに、人使いの荒い弟だ。」

服が破れ、血だらけのボロボロになりながらも、あやね姉さんは、地面に生えた凶器の数々を母さんに突き刺す。

そして。

ついに。

巨人の動きは止まった。

## 最終章 空飛ぶキリン

あれ？

本当に動かない。

母さん、息をしていますか？

「ふうふう。」

やっぱり生きてますか。

でも、その不機嫌そうな溜息、超こわいです。

「ふにゅん!!」

変な気合いと共に、母さんの全身の筋肉がメキメキと蠢もぐもぐき、巨大化し始める。

そして剣山のような体から、今まで必死の思いで刺してきた凶器が一斉に飛び散る。

「総理！伏せて！」

「！」

僕達に向かって、弾丸となった刃物たちが襲いかかる。

姉さんは、当たり前のように、全てを小刀で叩き落とす。

「……わかりましたわ。」

そうですね。

僕もわかりました。

次々を治癒していく刺し傷を見て、あなたの卑怯なまでの出鱈でた

目さが。

でも肉体的にはどうあれ、先端恐怖症の母さんには、精神的ダメージは与えられたはずだ。

「今回だけは、私も譲歩しますわ。」

「本当か！ゆきな！」

「私も、愛おしい子供たちを手にかけてたくありませんから。」

総理は思わず戦闘態勢を崩して、その言葉に食いつく。

彼にとって、それは勝利だからだ。

「でも、条件があります。」

「おう。俺や、この国に可能なことなら、最善を尽くして望みを叶える。年金改革、少子化対策、雇用問題、何でも言ってくれ！」

「いえ、そうではなくて。」

「？」

「利君、あやちゃん、ちょっとここにいらっしやい。」

嫌な予感的中するものだ。

不満のはけ口は、僕たちだ。

「わかりました。」

何事も無かったかのように、あやね姉さんはスタスタと母さんに近づく。

戦闘経験豊富な彼女は、すでに母さんに戦意がないことを理解しているらしい。

「あやちゃんは、お利口さんね。じゃあ、オシリを出しなさい。」

「！母上、それは如何いかがなものかと。」

「あなた達は、実の母親に手をあげたのです。賤は私の使命ですから。こんなことを聞いたら、父さんが泣きますよ。」

「むづ。どうしても、でございますか？一応、花も恥じらう女子なのですが……。」

「えい！」

そう言うと、母さんはあやね姉さんの革パンを引きちぎった。中からは、かわいらしい兎のキャラクターがプリントされた、おパンティーがあらわになる。

ナイス！母さん！

「ちよ、ちよっと！母上！」

僕は、一応総理の目を隠す。

この行動が、後に彼が僕に一生の遺恨を残す原因になる。

「歯をくい縛りなさい。舌を噛んで死にますよ。」

「く！不覚！」

「いくわよ？せ〜の！」

バシイイイイイイイイイイイイイイイイイン！！！！

うわ！

雷が落ちたかと思った。

「ぐ、ぐう……。」

あのポーカーフェイスの姉さんが痛みを隠せないなんて。純白の綺麗なお尻に、真っ赤に光る紅葉マークが痛々しい。

「次は、利君ね。」

そうだよね。

次は僕だね……って、それ僕死んじゃうじゃん！

「実は、母さん。僕は両足と腕の骨を、いい年をして性格の捻じり曲がった大人に折られてまして、次の機会に……って、総理！勝手に運ばないでください！」

「ほらよ、ゆきな。」

「ありがとう、真さん。」

「まって！まって！総理！なに僕のズボン脱がせてるんですか！変態！卑怯者！」

「さあ、歯を食いしばって。」

姉さんに殺されないために、ここまで頑張ったのに……。

ああ、結局死んじゃうのね。

しかも童貞のまま。

はあ。

さようなら、僕がこれから付き合うであろう、女の子達。

さようなら、そして僕が結婚したであろう、美人の奥さん。

さようなら、……愛おしくも、糞みたい僕の人生・

……。

いまだ謎に包まれた、あの『お台場事件』から五年、静寂を保っていた政界に激震が走った。

あたしの職場である新聞社の編集部は、おかげでいつも以上の

喧騒に包まれている。

なんでも、元総理大臣、鷲頭真の秘書が国会中の議事堂に乱入して、数人の議員にビンタしたというのだ。

あの鷲頭真のもとで政治を学んでいたのだから、エリートコーズまつしぐらの将来のホープが何故こんな馬鹿げたことをしたのだろうか？

噂では、この男はリスクマネジメントにかけては超一流で、現役のどの政治家をも凌いだという。

でも自分のリスクをマネジメントできてないじゃん……。

「おい！秋田！」

「はい！」

チーフがお呼びだ。

どうせ雑用でしょ？

「本人の顔写真が送られてきた。みんなに配ってくれ。」

「……はい。」

もうやだ。

こんな仕事ばかり。

……あれ？

この間抜けヅラ……まさか！

「チーフ！あたしこの人知ってます！」

「馬鹿野郎！政治家に詳しい奴なら、知ってて当たり前だ！鷲頭真の懐刀と目される男だぞ！」

「ち、違います！その……元彼です……。」

「ほ、本当か！」



間違いない。

今でも思い出す、このムカつく顔。

あたしの前で、鼻を伸ばして自分の姉の話をした馬鹿男だ。

「昔の縁で、話を聞けるかもしれません。」

「よし！取材に行つて来い！こんな大事件、滅多に無いぞ！」

「は、はい！！！」

まさか、あのシスコン野郎に助けられるとは……。

でも、出世のチャンスだ。

それにしても、もっとも政治とかけ離れたあいつが、政治家見習いとはね。

本当に、人生は何が起こるか分からない。

終わり

## 最終章 空飛ぶキリン（後書き）

最後まで読んでくれた方、本当にありがとうございます！  
はじめての小説執筆でしたが、なんとか最終回まで書き上げることができました。

次回は、もっとパワーアップして帰ってきたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6159u/>

---

総理を殴りに行こう

2011年11月16日23時57分発行